

人文会 ニュース

jinbunkai news

April 2019

NO. 131

1
15分で読む

平成の「出版界」

—— 専門書と書籍流通の30年

橋元博樹

29
書店現場から

文喫 六本木

—— 新しい本屋の実験

伊藤晃・有地和毅

39
図書館レポート

本の生態系のために、図書館ができること

大林正智

50
編集者が語るこの叢書・このシリーズ ⑮

『中井久夫集』刊行までのこと

守田省吾



www.jinbunkai.com

エーコ、チョムスキー 絶賛!

書物の破壊の世界史

シムメールの粘土板からデジタル時代まで

フェルナンド・バエス

アレクサンドリア図書館の栄枯盛衰、ナチスによる『ビブリオコースト』、イラク戦争下の略奪行為、電子テロ……どの時代にも例外なく、貴重な遺産、継承すべき叡智を失い続けてきた人類の『恥辱の年代記』

八重樫克彦、八重樫由貴子 訳 ▼3500円＋税

紀伊國屋書店

出版部:東京都目黒区下目黒3-7-10
営業TEL 03(6910)0519

ポストフェミニズム化する日本を斬る!

日本の ポストフェミニズム

「女子力」とネオリベリズム

菊地夏野 著

46判・2400円

消滅と忘却の歴史をすくいとる

「不法」なる空間に いきる

占拠と立ち退きをめぐる戦後都市史

本岡拓哉 著

A5判・3200円

東京文京 本郷2-27 大月書店 電話03-3813-4651
otsukishoten.co.jp (税別価格)

慶應義塾大学出版会

<http://www.keio-up.co.jp/>

シリーズ「世界を読み解く一冊の本」

クルアーン

—神の言葉を誰が聞くのか—

大川玲子 著 クルアーンを読む困難と楽しさを、ムスリム／非ムスリム双方の視点を盛り込み解説。激しくも奥深い、「聖典」の世界への案内書。 ◎2,200円

西遊記

—妖怪たちのカーニヴァル—

武田雅哉 著 壮大な物語のあらすじを追いつつ、中国の誇る〈怪小説〉のなりたちと伝播を、妖怪たちの目線から語りつくす。 ◎2,000円



〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 【価格税抜】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

御茶の水書房

増補版

国際女性デーは大河のように

伊藤セツ 著

A5判 二〇八頁 本体二六〇〇円＋税

グローバル女性連帯の日と定着した3月8日の国際女性デー、その起源をたどる。2004年以降の日本と国連の国際女性デーの主要な年表を作成し、解説を補章として附す。

増補改訂版

クララ・ツェトキン

—ジェンダー平等と反戦の生涯—

伊藤セツ 著

菊判 一〇八四頁 本体二五〇〇円

著者五五年間の研究の集大成。クララが生きた時代の「歴史」における「個人」の役割を考察する。社会政策学会学術賞受賞。

東京都文京区本郷5-30-20 ☎03(5684) 0751

平成の「出版界」——専門書と書籍流通の30年

橋元 博樹（東京大学出版会 営業局長）

はじめに

昭和から平成への改元が始まった1989年の出版界は消費税導入による混乱がありながらも、書籍と雑誌を合わせた売上金額は2兆円を突破し、ピークを目前に控えていた。世界的には冷戦の終結、国内的にはバブル崩壊の兆しという時代の転換点を示す兆候があっても出版は不況とは無縁である——。少なくとも外部からはそう見えていた。

一方で、「出版界」を、書店—取次—出版社によって構成された事業者群のコミュニティであるとするならば、当時からその内部は多くの課題を抱えていた。すな

わち、物流、書店経営、専門書の売上不振、読者の活字離れ、取引条件などの問題群である。指摘は1970年代の後半からなされていたが、ほとんどの問題が解決されないまま90年代を迎えた。戦後から高度成長期を経た出版界で売上が拡大しながらも、多くの課題を置き去りにしたまま迎えたのが平成元年だった。

したがって、「平成」の出版界は昭和の延長上ともいえた。すこし考えてみれば、天皇の死が訪れたからといって出版界のパラダイムが変わるということはないことがわかる。本来、人々の営みは天皇の代替わりなどとは無関係だ。そうであれば、昭和／平成というタームで時代を区切ることにさほど意味はない。

しかし、いったん歴史的視点で俯瞰してみれば、戦前

期に始まった日本の出版流通がいよいよ根本的な転換を迫られたのがこの平成の特徴であるともいえる。現代の出版流通を特徴づける委託配本制度は1909年に実業之日本社の雑誌『婦人世界』によって始まった。これに23年、講談社の『大正大震災大火災』が書籍第一号として加わり、41年の日本出版配給株式会社（日配）の成立をもって出版界全体を覆いつくした。戦前から慣例的に行われていた定価販売は、敗戦を経て53年の改正独占禁止法のもと再販制度として定着した。

平成期は、戦前・戦時の遺産を引き継いだ出版界が、本格的に相対化されざるをえなかった時代でもあった。しかし、このことは裏を返せば、平成とはやはり昭和の延長上にあることの証でもある。

このようななかで、本稿の関心は「専門書籍の流通」をめぐる問題系にある。平成期に「出版界」がどのように語られたのか、変化したのか、あるいは変化しなかったのか、という点を専門書をキーにスケッチしてみたい。専門書にフォーカスするのは「人文会ニュース」という性質上、読者の関心もそこにあると考えられるからだ。とはいえ、日本においては専門書独自の流通というもの

は、一部を除いて存在しない。あらゆるジャンルを包括した「出版」流通のプラットフォームが出来上がっていることこそが、良くも悪くも日本の出版界の特色である。「出版界」とは、雑誌やコミックス、実用書、学習参考書、文庫、新書、文芸書、専門書、ビジネス書など多様な分野の集合体だといえる。したがって本稿は「出版界」に包摂された「専門書」という視座を前提とする。

ところで、わたしの出版人としてのスタートは平成元年を少し過ぎた1991年、神保町にある人文書出版社の営業部員としてであった。前時代の、浮かれたポストモダン思想が残り香を放ちながらも次の流行を準備している。平成の始まりの人文書業界はそんな時代だった。じつのところ人文書の出版営業という仕事がいったいどういうことをするのかもわからない状態でのスタートだったのだが、物流部門を兼ねた営業部では仕事の大半は、注文の書籍を倉庫の棚からピッキングして取次の集品トラックに運び込む「品出し」といわれる作業に費やされた。肉体的にはけっこうきつかったが、倉庫を兼ねた神保町の薄暗い社屋から見えた当時の出版界は、そうとう牧歌的であった。「かたい本、専門書はもう売れ

ない」と言われながらも、危機感や切迫感はいまよりもずっと小さかった。書店員との飲み会が毎晩のようにどこかの居酒屋で行われ、ゴルフや温泉旅行で人脈をつくるのが出版社の営業マンの何よりも大事な仕事であった（ように見えた）。新刊の部数はしばしば営業部長の勘と経験で決まり（これがよくあたった！）、重版のタイミングや判断もまた同様であった。いまでも印象的なのは人文書の発行部数の判断だ。「人文書は必ず3000部は売れる」ということが関係者の間でまことしやかに言われていた。^{*}自分が読みたいと思った企画は必ず3000部は売れる、なぜならわれわれ（編集者）は、それほど特殊な人間ではなく、同じように考える読者は日本中に3000人はいるから、なのだそう。いまから考えれば本当に牧歌的な時代だったと思う。

それでも十分に経営は成り立っていた。営業には「勘と経験」「愛嬌と体力」がなによりも重視される時代だった。

平成初期の出版界はなにを問題としていたのか

売上が伸長し、新製品が次々と市場に投入されるのが産業としての評価の対象となるものだとしたら、平成初期の出版界は、売上高も新刊点数も年々伸長し、間違いなくその繁栄を見せていた。にもかかわらず、業界紙誌では数多くのプレイヤーや論者がさまざまな問題を指摘していた。

問題のひとつに客注スピードがあった。書店が単品書籍を注文したときの入荷がきわめて遅いということは1970年代より指摘されていたが、90年代になっても一向に解決へと向かう兆しはなかった。96年の出版文化産業振興財団の「全国読者意識調査」の読書アンケートによれば、書店に本を取り寄せてもらった場合、自分の手に入るまでの日数が、5日以内はわずか8・1%、1週間位24・9%、2週間位33・4%、3週間位16・6%、1ヶ月以上4・7%であったという。客注にかかる日数は早くても1週間、半分近くが1ヶ月近いということになる。書店も取次も手間ばかりかかる客注を積極

的には扱おうとしなかった。客注を断つても利益を取ることを経営方針とする書店もあった。^{*2} 98年に図書館流通センターの尾下千秋氏は『変わる出版流通と図書館』（1998）で図書館販売の立場からこの客注問題にコミットし「図書館側からすると、出版界は客注に対してあまりにも冷たい、ということになります」と述べている。

1989年の返品率は書籍が33・4%、雑誌が20・7%。いまよりいくぶん小さいが（2017年は書籍36・7%、雑誌43・7%）、書籍については70年前後よりすでに30%前後を示していた（書籍の最高値は98年の41%^{*3}）。その後は現在にいたるまでおおむね35〜40%で推移している。年々、拡大する売上に隠れてしまい、いまほどの深刻な問題とはされていなかったものの、出版社の過剰押し込み返品、取次の不適正な配本、書店による注文品や買切り品の返品などがなかば商慣習として定着してしまっており、数字を引き上げていた。

物流問題はきわめて今日的な問題であるともいえる。1990年当時にも運送会社の過酷な労働条件、段階的な運送業界からの運賃値上げ要求があった。それを背

景に90年5月に日本出版取次協会は「出版物安定輸送確保について」というアピールを発表した。曰く、「過去15年、書籍の平均定価はわずか15%、雑誌は過去10年間で10%しか上がっていない。それに対して取次業界全体では、これから3、4年間に運賃上昇に伴うコスト増加分は100億円を大きく超える」というのである。この問題は、当時の「出版界における人不足」問題が後押ししたという事実はあるにしても、同年に日本出版取次協会から「書籍の適正流通を目指して」という文書が出されていることからもうかがえるように本質的には流通マージン問題だった。^{*4}

これに加えて書店経営問題があった。日書連は1991年に9年ぶりの「全国小売書店取引経営実態調査」を実施し、3927店の声を『書店経営白書』としてまとめた。そこでは、依然として多くの中小書店が苦境に立たされている様子が示され、出版物は他の物価と比較して定価上昇が低く^{*5}経営コストの上昇を吸収することができないなど指摘されると同時に、年間約1000店の転廃業店があることが報告された。^{*6} また同年、書店の正味引き下げを訴え、「書店の窮状を

訴える東京大集会」を開き業界内外に苦しい立場をアピールした。

そのほかにも、前述したように再販制度の危機、業界内の取引条件問題、専門書の売上不振などの構造的な問題が散発していた。それらが相互に絡み合って平成初期の出版界の複合的問題群として語られていた。

拡大する出版界

しかし、注意しておきたいのは、このような問題を抱えながらも1990年代の出版界は拡大の途を歩んでいたことだ。拡大は、出版社、書店、取次それぞれに起こった。売上額は戦後より順調に伸びてきた。ここでの拡大とは、売上の伸長を背景に出版界が自らのサイズを拡大させたという意味だ。実際になが起ったか。順を追ってみていこう。

第一に出版社が新刊点数を増やした。一般論として、メーカーが多くの新商品を市場に供給することは批判されることではない。むしろ消費者に幅広い選択肢を提供し効用を増加させたこととして歓迎されるべきである。

ましてやその商品が出版物であるとなれば、多様で自由な言論を保障することにもつながるからなおさらだ。読者から見れば、次々に刊行される新刊を目の前にして出版界は活況であるかに見えるだろう。しかし問題はそう簡単ではなかった。たとえば名古屋大学出版会の橘宗吾氏が『学術書の編集者』(2016)で指摘するように、それは需要を無視した「過剰」供給だったのではないかという点である。

つくり手の観点からいえば、デジタル社会の到来によって「1980年代半ばから、組版・印刷プロセスでの電子化を含む技術革新が広がり、ワープロ・パソコンの登場を経て、執筆・編集・制作過程での電子化が進んで行くことが、新刊点数刊行増大の技術的な基礎」となったといえる。この技術的な後押しを得て、さらに経営的な観点から「従業員数の増加とあわせて、供給側の大きな促進要因となった」ことは間違いない。この指摘に付け加えるとすれば、1点当たりの販売部数が減少しても一定の年間売上予算を確保するために出版社が新刊刊行点数を増やした、という理由もある。「ところが、1990年代に入るまではそれがあつた程度需要に

見合っていたものが、それ以降は「過剰」供給となった」といえる。消費者のニーズではなく、出版社側の事情によって刊行点数が増え続けたが、それが読者に受け入れられたのは90年代までだったという。

新刊点数の増加はその後も続く。1990年は4万点に過ぎなかった書籍新刊点数は伸び、2013年にピークの8万2000点に到達する。理由はどうかであれ新刊刊行増加は結果的に出版界に打撃を与えた。なにより書店店頭での陳列の短期化につながった。売り場面積が拡大していたとはいえ、20年あまりで倍以上に点数が膨れ上がった新刊を、すべて等しく陳列するのは困難である。委託制度のもとでは自ずと1点当たりの陳列期間は短くなりそれが販売ロスにつながる。実際に、刊行してから新聞書評などに掲載される2、3ヶ月後には、本がすでに書店店頭にないという話をよく聞いた。とくに、高額で回転率が低いがゆえに時間をかけて販売されるべき専門書が早々に店頭から消えることになる。

第二に書店が大型化・郊外化した。

新規出店数の第一の山は1980年代である。新規店舗は80年代に増え始め87年の1130店舗、6万坪を

ピークに、いったんは下がる。90年を境に再び増加に転じ96年の第二の山の頂点では、911店舗、7万坪と拡大する。第一と第二で店舗数と坪数が逆転しているのは、いうまでもなく平成の新規書店が大型化したからだ*7。

主だったものとして、1995年に駿々堂神戸店、96年にジュンク堂書店難波店、紀伊國屋書店新宿南店が、97年にはジュンク堂書店池袋本店がオープン。いずれも1000坪を超す超大型店である。さらにジュンク堂書店池袋本店は2001年に2000坪に増床し、名実ともに国内最大規模の書店となった。

郊外型書店の一号店は1975年に60坪で開業した愛知県の三洋堂書店である。出版評論家の能勢仁氏の『書店業のいまを読む』(1994)によれば、もっとも郊外店が増えた時代は75年から80年代半ばごろであったという。とくに83年からは年間1000店を超す出店があり、その頂点は85年の430店、86年の451店であった。平成になってややトーンダウンしたものの、大型小売店の出店にブレイクをかけていた大規模小売店舗法が完全廃止にいたる2000年頃までには、段階的に規制が弱まるにつれて、郊外店もまた増えた。

こうした郊外型書店ほど大規模化する傾向が強く、そのために店内に多くの専門書棚も設置された。だが、かならずしもその店舗において専門書が売れていく環境にあったわけではない。棚割りは近隣の読者ニーズへの配慮によるものではなく、デベロッパーの出店計画で広大な売り場面積を割り当てられた結果にすぎなかったからだ。

わたしは2000年代に専門書版元の営業担当者として全国各地の郊外型書店を訪問したが、当初の出品要請に従って出荷した専門書籍が、オープン当時は丁寧に棚に並べられていても、1年後に訪れてみるとカバーが日焼けしてしまい、ただの棚のオブジェになっている悲しい光景に何度も出くわした。読者は都市部に集中しているにもかかわらず専門書が郊外に分散しているという需給のギャップは明らかであった。だが、書店の大型化にはキャパシティの側面から専門書が不可欠であった。そのようにして書店は大型化し郊外化したのだ。

一方、雑誌、コミック、文庫を売る新しい場としてコンビニエンスストア(CVS)が増えた。能勢氏によれば1974年に第一号店が登場したCVSの雑誌・書

籍の売上は、92年には4506億円に上り、出版界売上の13・5%を占めていたという^{*3}。日本フランチャイブチェーン協会の調査では、CVSの店数は平成元年の89年1万6466店、93年2万2852店と急速に増え続け2002年には4万店を突破している。このCVSの隆盛は、大型店、チェーン店、量販店の登場により、ただでさえ逼迫していた中小書店の経営を直撃した。「中小書店のメイン商品であった週刊誌、雑誌が売れなくなったことが直接の引き金であった」のである。「雑誌がどこでも買えるようになった市場の変化が、地域に密着していた歴史ある中小書店を廃業に追い込んだのである^{*4}」。

さて、ここまでで出版社と書店の拡大をみてきた。最後は流通の要たる取次会社である。大量の新作を書店に送り込むために必要とされたのは、取次の物流倉庫の拡充と情報システム化であった。

日本出版販売株式会社(以下、日販)は1989年に王子流通センター敷地にハイテクセンターを開設し、出版社・書店とのオンライン化をおしすすめた。91年にはCVS流通センターを開設した。すでにこの時点で「CV

S 向けの取引は売上高で日販全体の10%、取引店舗数で7000店に達し¹⁰ていた。91年に王子流通センター内に学参センターを開設、医書・文庫・新書・コミック・専門書などの単品管理体制をつくりあげた。94年には雑誌の返品業務を行う所沢流通センターがオープン、95年には新座流通センターが書籍返品業務のセンターとして、96年には練馬流通センターが雑誌の発送拠点として開設。98年には新王子流通センターが「最新鋭・世界最大級」の機器をそなえて開設した。2000年にはwebBookセンターを立ち上げ、04年には2500坪に増床している。インターネット書店のリクエストに応じるためである。¹⁰

株式会社トーハンは、地方の物流センターとして1992年に中部ロジスティクスセンターを、95年に近畿トラリスセンターを開設した。前後して92年に中央物流拠点である東京文京営業所内の専門書センターをリニューアルし「総合専門書センター」を開設、「文庫センター」「総合コミックセンター」を埼玉県川口市に開設した。「世界最大級の出版流通センター」として雑誌返品処理作業の自動化を実現した「東京ロジス

ティックスセンター」を96年に埼玉県加須市に設立した。¹¹2000年には書籍の単品流通をめざした株式会社ブックライナーを開設。02年には埼玉県上尾市に雑誌の物流センターを、07年には埼玉県桶川市に書籍物流センターを開設し、文字通り世界一の出版流通体制をつくりあげた。

1990年代から2000年代はこのように、二大取次の積極的な設備投資が見られる。投資は、主に雑誌やCVS取引の拡大を見越してのことであるが、他方では、星野渉氏が『出版産業の変貌を追う』(2014)で指摘するように、書籍流通に関する方向転換のためであった。それは「従来の撒く流通から配る流通」への革新的な転換である。それまでの、大量に仕入れて大量に販売するビジネスモデルから方向転換し、書店からの多品種少量商品の注文に耐えうる書籍の流通センターとして立ち上げたのが、日販のwebbookセンターや、トーハンのブックライナーおよびEihonであった。

郊外化・消費社会化と専門書の行方

このように、あらゆる意味において1990年代の出版界は業界全体が拡大に向かう途上であった。新刊点数と書店売り場面積が増え、それを支える取次物流基地も巨大化した。

だが、肝心の売上金額は1996年にはすでに頭打ちになっていた。

書籍販売額のピークが1997年、雑誌販売額のピークが96年、書籍と雑誌を合わせた販売額のピークも96年である。この時期をひとまずの出版界の売上の頂点とするならば、その時期を越えてもなお刊行点数、書店売り場面積は増え続けた。新刊点数は96年の6万点からゆるやかに増え2013年8万2000点に達し、その後すこしずつ減少しているものの17年の時点でも7万5000点と、96年の売上ピーク時点を上回っている。また、書店の売り場面積総数は10年の95万6000坪まで伸びる。^{*}

販売額がピークアウトしてから、新刊点数と売り場面

積の両者がピークアウトするまでの間に10年以上も隔たりのがある。

じつは、この販売額の拡大は、書店売り場面積が拡大することによって、書店が増え続ける新刊を吸収していったにすぎなかった。要は出版社の社外在庫が大量に回っていたわけである。通常われわれが販売額と呼んでいる出版科学研究所の「出版物推定販売金額」は、取次から書店への販売額(送品・返品)をベースに金額を算出する。書店在庫が常に一定であれば、その金額の上下はそのまま消費者の購入金額の上下と等しいが、書店の売り場面積と在庫が増えると、「販売金額」と実際の購入金額とのあいだに差異が生じる。見かけ上、売上が伸びている1990年代も実質的には下降をたどっていたということになり、同時に97年以降のマイナスは見かけよりもさらに深刻であるということでもある。

これは「過剰出店、過剰新刊発行」の中でのマイナス成長である。このような指摘を小田光雄氏は『出版社と書店はいかにして消えていくか』(1999)で行った。取次の経営問題から始まって、明治期以来の「近代出版流通システム」が機能しなくなるこの時点までの様

子を精緻に描いてみせ、業界に少なからずのインパクトを与えた。小田氏の出版流通論の白眉は前著のテーマ「郊外」論と接続したところにあり、前掲書に先立って『「郊外」の誕生と死』（1997）では、日本社会が郊外化していく様子を描いていた。1980年代を通じて、衣料品店、カー用品店、ファミリーレストラン、パチンコ店などの商業店舗同様、書店も「確実にロードサイドビジネス化していった」という。本書は直接出版界に関する書籍ではないが、平成へといたる出版流通史を考えるうえで示唆に富む。書店にかかわる部分を引用しよう。

「1970年代までは、書店も他の多くの商店と同様に、立地条件としては、駅前か商店街、学校前があたりまえで、郊外という立地はまったくイメージされることがなかった。本は町なかにある書店に出かけて買って買うというのが、従来の読者の位相だった。それに郊外に読者がそれほどいるとは考えられていなかった。それは、郊外生活者の交通の手段が自動車であり、電車で通勤するサラリーマンが車中で読書することは想像できても、自動車と本が

うまく結びつかなかったからだ。

しかし実際に郊外に書店が誕生し、1980年代に書店が郊外型になっていくにつれて、郊外には「読者」のかわりに膨大な「消費者」という群衆が発見されるのである。郊外型書店では、本はもはや文化的商品というアウラから解き放たれて、かぎりなく消費され、他の日用品と同じ位相に追いやられる。そこで売れるのは、雑誌、コミック、文庫、そしてベストセラーといった大量生産・大量販売・大量消費されるものが過半数を占めることになり、このシステムの外部にとどまらざるを得ない本は排除されていく。そしてその傾向は郊外型書店の数の増加につれて加速され、どの店の書店の棚の光景も均一化されることになる。もはや書店は、檸檬を仕掛ける場所ではない。」

郊外では小田氏のいうように大量の消費者が、雑誌・コミック・文庫・ベストセラー本を「読み捨てる」層として形成されていた。

一方、都市部に目を向けてみれば、急成長するCVS

では、雑誌、コミック、文庫本が売り場の一角を占めていた。

昭和から平成初期にかけての出版流通システムの膨張はこのようなものに支えられていたということになる。ここには、専門書売る環境も専門性もない。郊外店の棚には見事な数の専門書が置かれていることはあっても、不必要に広い売り場をただ埋めるためだけに放置されていたものだったに過ぎない。

並行して、店内に岩波書店やみず書房の棚をつくり、その外商部門では得意先に、歴史書や哲学思想書などの人文社会系のかたい本を届けていた、そういうまちの個人経営の中小書店が急速に力を失っていく風景が昭和の終わりから平成にかけて常態化した。

社会学者の吉見俊哉氏は2000年に、『別冊 本とコンピュータ』誌で「それまでの日本の出版市場を通じてつくられてきた文化的公共圏が、いまや機能しなくなりつつある」という危機感を表している。「日本の出版界はこれまで、アジアの国々のなかでは例外的に分厚い自国語の読者市場を有し」、そのなかで「前衛的な知識人と大衆的な読者をつなぐ、ゆるやかな言論空間を成立

させてきた」。すなわち、日本の隅々までを覆った出版社、取次、書店のインフラが、知識人と大衆をつなぐものとして、人文系の学術書や思想書、古典や文学などの「かたい本」の読者を誕生させた。これは、近代日本社会の「識字率の高さと大手出版社による大量生産体制が結びつき、ナショナルな規模での読書共同体が成立」した結果であった。そのスタートは「円本ブームが起こった1920年代^{*13}」であり、戦後も連続的に続いていくのであるが、そうした「文化的公共圏」が機能したのは70年代までである、と述べている。^{*14}

「失敗のプロジェクト」と日本型書籍流通への批判的言説

いまさらいうまでもないことだが、先進諸国のなかで書籍と雑誌が完全に同じプラットフォームを利用している国は日本において他にない。さらにそれを中心で担うのがわずかに40社程度の取次会社であり、そのなかでも上位2社に取引が極端に集中している。この、書籍と雑誌を統合した「一元的な流通体制」と「取次寡占」に、さらに「委託制・再販制」を加えたところに日本の出版流

通の特色がある。ただしその独自性は、委託制や再販制そのものにあるのではなく、新刊見計らい、「配本」を、可能にするための、「委託制・再販制」にあることに注意が必要である。たんなる委託制、すなわち返品を前提とするだけの売買（返品条件付売買^{*15}）は、世界各国の書籍取引で普遍的にみられる形態である。また、再販制（再販売価格維持制度）にしても、時限再販、部分再販、定価販売制とバリエーションはありながらもEUをはじめ多くの国で採用されている。書籍販売における世界で普遍的な商慣習としての「委託制・再販制」と日本のそれを分けるのは、寡占的な取次の存在を背景とした「新刊見計らい」配本である。換言すれば、日本では定期購読の雑誌だけではなく新刊書籍においても、小売側の注文行為の必要や権限がないという点で、世界でもまれに見る商慣習を採っているということでもある。

2000年を前後して、その書籍流通についての積極的な改革構想があった。出版界を賑わせたジャパンブックセンター（JBC）構想である。JBCとは書籍流通改革を目指し1996年に立ち上がった第三セクターの名称であり、長野県須坂市に出版社の「共同倉

庫・物流基地」を建設し、新刊委託配本制度からもれる単品の補充品や注文品など、従前の書籍流通が不得手としていた部分を担うことが計画されていた。ほかでもない、70年代より出版流通の陥穽として手付かずにあった、迅速な書籍単品流通の試みであった。90年代初期に「すべての書籍を一箇所に保管管理し、流通させるシステム」の必要性を感じた平安堂社長の平野稔氏は、地元長野県に「印刷・製本から保管・管理・配送まで一括して集中的に行うことのできる」センターの設立を発案し、「91年には出版社13社と取次8社が現地を視察し、共同事業の合意を得た^{*16}」。

1996年には、須坂市と出版界各社による第三セクターとして運営会社を発足させた。その時点で文藝春秋、岩波書店、中央経済社、農山漁村文化協会、東京大学出版会、三修社、八木書店、大修館書店の書籍出版社と、日本出版販売、大阪屋、栗田出版販売、中央社、日教販、太平洋社、協和出版などの取次会社が出資者となった。こうして代表取締役役に二玄社社長の渡邊隆雄氏を据えた運営会社が設立し、順調にいけば上信越自動車道の須坂長野東インターに隣接する場所に延床6万平米の書

籍物流拠点ができるはずだった。だが、プロジェクトに必要とされる資金調達が進まなかった。もとより下降し始めた出版界には資金調達できるだけの経済力がすでに不足していた。また外部企業や公的資金からの出資もうまくいかなかった。2002年には、資金調達のめどが立たないままJBCは解散することになる。

後に、『出版研究』(45号、2014)誌上でJBCに言及した鈴木親彦氏は、これは「未完のプロジェクト」であり「失敗のプロジェクト」であるとしながらも、それでも「先見的なスタンスであった」と評価もしている。たとえばJBCのパンフレットにはこう書かれている。「我が国の本の流通の欠陥が委託流通の過剰にあることを考えると、この構造を大きく変化させるJBCは、注文流通の増加、返品・減少に大きく貢献することになるでしょう」。この未来像が、雑誌の販売額が減少して「書籍が中心の商材になりつつある2014年」^{*17}からみると、十分に先見性をもちえるからであるという。

もっとも、鈴木氏も指摘するように、このプロジェクトがカバーする範囲はあくまで倉庫やピッキング業務であり、幹たる物流・配送はそれまで通り取次に依存する

のである。また時期を同じくして取次も書籍倉庫の建設に乗り出し始めていたので、相対的にこのプロジェクトの価値が薄れたという側面もある。そして、構想だけで終わったからだろうか、あるいは中心メンバー間での対立があったというから、そういう理由もあるのだろうか、事後的にこのプロジェクトが顧みられることはほとんどなかった。しかし、委託配本制度に頼らずに、注文品流通をその主軸にすえた書籍流通制度にシフトする可能性を秘めていたという意味では革新的でもあったし、なによりもありえたかもしれない書籍流通のオルタナティブとして、それも書籍出版社の協業による形態として、失敗の事実とともに記憶しておいても無駄ではあるまい。

他方で、このJBC構想と同時期に出版界、専門書界に衝撃を与えたのは鈴木書店の経営破綻だ。鈴木書店は人文社会科学書を主に扱う専門取次だったが、1990年代の末頃からその経営危機が取り沙汰され、主要取引出版社の支援の甲斐なく2001年に破産した。戦後の取次倒産としては、99年の柳原書店、00年の北隆館に次ぐものとなる。専門性をそなえた仕入担当者や営業担当者を抱え、書籍出版社や書店に信頼されてい

ただけに、同社の倒産が専門書業界に与えた衝撃は小さくなかった。結果的には出版社と書店はすぐに帳合変更を行い、代替の物流網をつくることによって実質的な混乱は少なかった。支援に入った岩波書店の連鎖危機説も流れはしたが「岩波書店の経営が破綻することはない」と、倒産の数日後に岩波書店の大塚信一社長が記者会見を行い否定した。とはいえ専門書を販売する環境が急速に悪化していることは明らかであった。直接的には人文社会科学系の出版物の売上の減少によるものだが、構造的には大学生協と専門書出版社の間に挟まれた鈴木書店のマージンが少なかったことが原因ともいわれており、その後も03年には社会科学書の専門取次日新堂書店が倒産し、13年には、これも社会科学書の専門取次明文図書自主廃業を招くにいったった。

日配から引き継いだ豊富な資産を基盤に、物流、情報システム開発に膨大な投資を行っている総合取次とは違い、鈴木書店や明文図書は戦後に開業した個人経営の書籍専門取次である。神田村と呼ばれていた千代田区神田に本社と店売を構え、きめ細かい営業体制によって大型書店と専門書出版社を結ぶ小規模な取次であった。

2010年代になると中堅の総合取次も相次いで経営危機を迎えた。15年には業界4位の栗田出版販売が、16年には5位の大洋社が経営破綻する。中小の取次が消えていくたびに書店は帳合変更を行い、その取引の隙間をトーハン、日販が埋めていく。両取次と取引口座をもたない出版社はほぼないといっている。表面上は問題なく出版物を流通させることができた。そういうふうにして00年代以降の大取次は、一方で経営の行き詰まった書店を財政的に支えながら（民間企業のM&Aによる企業買収という形をとりながらも、その内実においては業界防衛という「公共的」側面が強いのは明らかであった）、他方では廃業する中小取次の代替となり、流通の隙間を埋めた。こうした出版流通において二大取次の存在感は果てしなく大きいものであったといえる。

ただし、そのような行為は緊急避難的な対処療法としては奏功したとしても、出版流通の本質的な問題解決に向かうわけでは、もちろんない。同時代の出版流通を対象化する言説がいくつも見いだせる。1999年の小田光雄氏の議論もそのひとつだが、そのほかにも90年代初期から2000年代の初期にかけて木下修氏、蔡星

慧氏などが書籍流通の不備を指摘した。

木下修氏は「書籍流通の現状その課題」(『RIRI 流通産業』25巻1号、1993)、『書籍再販と流通寡占』(1997)、『オンライン書店の可能性を探る』(共著、2001)のなかで日本の書籍流通の「ゆがみ」を問題としている。ゆがみとは、たとえば注文品流通の遅さ、出版社の高正味(流通マージンの低さ)、40%という返品率の高さである。これらの事柄が流通システムの雑誌流通への依存の高さからくるという。木下氏の指摘は、書籍という「文化商品」が雑誌に從属していることへの批判である。「文化」を標榜しながらも雑誌流通に依存するばかりで、自らの流通に十分に手をかけられていない書籍業界への痛烈な批判であり、エールでもあった。

蔡星慧氏は2000年に『出版産業の変遷と書籍出版流通』で、雑誌流通優位の巨大な取次機構が書籍流通には適していないのではないかと指摘し、「委託制自体が、大量の部数を定期的に流通させるための近代出版の発展過程における雑誌出版に」は適切であっても、「中小出版社の少数の書籍出版に適切であろうか」と問いつけていた。

両者ともに、当初より「書籍流通」をどのようにするのかという視点をもっていることに注意しておきたい。日本が世界に誇れる出版流通とは雑誌流通のことである。「文化商品」と言いながらも書籍はその流通を、雑誌流通に依存している。その結果「ゆがみ」を生じせしめているというのである。

それにしても当時、雑誌の販売額がこんなに落ち込むことが予想されていただろうか？ 出版界に広がる「雑誌流通に依存した書籍流通」という見方が浸透するのは、管見では2010年をだいたい経過して雑誌の売上が書籍を下まわってからだ。1970年代半ばから続いた「雑高書低」時代が終わり、雑誌が41年ぶりに書籍の売上を下回ったのは16年だった。

流通とは必要とする人に商品を届けることである。しかし、その想定している読者がすでに不在だとしたら、それはもはや出版「流通」に解決できる問題ではない。雑誌販売の低迷は雑誌というメディアそのものの価値が疑われた結果であって流通の問題ではないことがおおよそ共有されている。一方で、現時点においてまだメディアとしての有用性を保っている(と思われる)書籍に

は、流通の問題が重くのしかかっている。それは「ゆがみ」を通り越して、いまや雑誌販売の減少によって機能不全に陥りかけている「流通」そのものをどうするのかという問題である。以上が平成を終える時点での出版界の共通認識である。

このような状況のなかで、こんにちでは、1970年代より続いてきた問題の指摘、出版不況・出版危機言説は、「恐慌」「崩壊」「敗戦」などと、ますます拡大・エスカレートしてきている。だとすれば、平成を終えた次の時代に待っているのは、もう出版界のカタストロフィーしかないのか？

だが、ここでは先を急がずに、平成の後期2010年代に起こった変化について少しばかりみておきたい。

デジタル化と多様化の時代

平成が昭和からの「連続」ではなく「断絶」であるとするれば、その「断絶」を見せつけたのは、なによりもアマゾンであった。アマゾンがインターネット企業でさらに外資系であることを考えれば、日本における成功は、

1990年代の日本の社会的背景といえるデジタル化とグローバル化を反映したものともいえる。

1995年アメリカでサービスを始めたアマゾン・ドット・コムが日本に上陸したのは2000年である。90年代には、丸善インターネットショッピング(95年)を皮切りに、紀伊國屋書店Book Web(96年)、文教堂JBook(99年)、三省堂Book Site(99年)、es-Books(99年)がサービスを開始し、00年にはドイツ資本のBOLジャパン(00年)、TRCが運営するbk1(00年)、中小出版社の直販サイトである版元ドットコム(00年)、それに加えてネット通販会社の運営する楽天ブックス(00年)が営業を開始していた。このように先行するネット書店がありながらも、アマゾンが上陸前から日本において脅威をもって迎えられたのは本国アメリカでの成功によることが大きい。創業からわずか4年目の98年、アマゾンは書籍売上高でバーンズ&ノーブル、ボーダーズに次いで全米第3位の座を獲得した。インターネット書店としての売上高では当初より世界第1位である。

他方で、それでも、「アメリカと比べて日本には書店

が多い」「アメリカと異なり日本には再販制度がある」「そもそも本は現物を手にとって買うものである」などという日米の社会的条件、出版界の慣習の違いから、アマゾンの成功を疑問視する声も多かった。

アマゾンの日本での成功は、経営的・財務的な観点からは、北米と同じく豊富な資金力による赤字覚悟の積極的な投資であるといわれている。一方、読者の観点からは、ワンクリック発注による利便性、読者レビューやレコメンド機能の充実、同一画面に中古本や電子書籍など選択の多様性を提示した書誌ページの閲覧性などが評価された結果だともいえる。だが、より根源的には、完全なデータベースによる検索機能と配送スピードの速さであろう。

前者については、柴野京子氏が『書物の環境論』（2012）で述べるように、当時の日本のネット書店の検索システムがきわめて不十分であったことが指摘される。柴野氏によれば、初期の日本のインターネット書店の多くは検索システム利用の無料化をためらっていた。書誌データベースと検索システムそのものを「商品」として、有料会員にのみ使用できるようにするなど、利用

料によって開発費を回収しようとしていたのだ。こうした日本の出版界は、当初より無料公開の検索とデータベースを採用していたアマゾンのビジネスモデルに後塵を拝することになった。

後者については、全国各所に設立した自社の物流センターと上述の検索システムを掛け合わせて、早ければ翌日には読者の手に渡る仕組みをつくりあげたということであろう。日本の運送会社の卓越した迅速性もこれを後押しした。

そう考えれば、昭和より続いた客注問題の解のひとつがアマゾンだったということにもなる。書籍流通に不可欠のものとして2000年前後より明示的に望まれていた（にもかかわらずJBC構想では挫折した）書誌データベースと物流センターは、じつのところ、ここにおいて形をかえて実現されていた。結局、日本の出版界はかなり後までアマゾンの強みの本質に気づかずになっていたのである。控えめに言ってもアマゾンが出版界の理想を実現してみせた、オルタナティブな「書籍流通」であることは疑いえなかった。

もっともアマゾンについては数々の批判もある。そ

れも国を超えての批判だ。アメリカでは2014年に「オーサーズ・ギルド」「オーサーズ・ユナイテッド」の作家グループと、独立系書店の組合「ABA全米書店協会」の三者が、独占禁止法の疑いでアマゾン进行调查するよう司法省に陳情を提出した。フランスでは13年にネット書店に対する5%の値引きと書籍の無料配送の同時併用を禁止する法律、いわゆる「反アマゾン法」を成立させた。フランス当局は「無料配送はアマゾンが書籍市場を征服するための道具の一つ」なのだとみなしている。^{*16} 日本では高須次郎氏が『出版の崩壊とアマゾン』（2018）で攻防の詳細を報告しているように、日本出版者協議会が12年に「10%をポイント還元するスチューデント・プログラムが再販契約に違反する」と、アマゾンに対して中止の申し入れを行った。

こうしたいくつものアマゾン批判は、1970年代以降の「消費者主権主義」の危うさを告発したものだ。アマゾンの謳う「顧客第一主義」が、社会における労働―生産―流通―消費のバランスを破壊するのではないか、という指摘である。そもそも、人は消費者としてのみ生きていくわけではないし、消費者の利益が万人の利益に

なるとも限らない。こういう観点に立てば、アマゾンの浸透は、世の中の人々の価値の力点が「労働」や「生産」から「消費」に移された、ひとつの帰結でもあるともいえる。

平成の特色の二つめは「多様化」である。多様化といってもしばしば話題にされる出版物の多様化ではない。ここで取り上げたいのは流通を含む出版活動そのものの多様化である。

日本の出版界を直撃したのはアマゾンだけではなく、ときに公共図書館の無料貸出であったり、ブックオフなどの新古書であったり、インターネットの情報であったりした。出版界はそのたびにこれらの「外部」に対して攻撃、排除、統合を繰り返しながら、しかし、総体的には力を失っていった。外部のプレイヤーが読者の一定の支持を得ることによって、出版界が相対的に縮小する様をみてきたのが30年の歴史だった。変化はつねに出版界の「外」から訪れた。

同時に、出版界のプレイヤーたちが界の「外」に活動の領域を広げ始めたことを探すのも難しくない。1970年代に主に郊外書店で始まった、カフェ、雑

貨売り場を併設する書店複合化は、いまでは立地を問わず書店経営には欠かせないものとなった。出版社のライツビジネス、電子書籍やプリント・オン・デマンド（POD）出版、さらに海外市場への展開などの動きも次々と現れた。資本金のない中小専門書出版社も、電子書籍やPODについては少なからず取り組み始めている。

さらにその外側に目を向けてみれば、新しい多様な動きがある。

トランスビューは、老舗専門書出版社の営業担当であった工藤秀之氏が2001年に設立した人文書出版社である。設立時より取次との取引口座をひらかずに書店との直取引を行っていた。12年からは「取引代行」サービスとして、主に人文書系の小出版社の書籍を自社の流通ルートに載せて書店に届ける取り組みを開始した。石橋毅史氏の『まっ直ぐに本を売る』（2016）でも紹介されている「トランスビュー方式」である。その核となる「注文出荷制」とは、文字通り書店からの注文に応じて出荷するものあり、「書店の主体的な仕入れに任せ」という点において、これまでの「委託配本制」と対をなす考え方である。

東京荻窪の民家を改装し20坪でオープンしたTitle eは、大型書店の人文書担当であった書店員による独立系書店として注目を集めている。取次から仕入れる点では従来の書店と変わらないが、ここでも配本に頼らず、店主自らの判断で仕入れを行っている点が特徴的だ。店主の辻山良雄氏は『本屋、はじめました』（2017）でこう述べている。

「新刊配本に任せていれば、自分の店に合わない商品も自動的にたくさん入ってくることになる、それをそのまま店頭に並べていると、自分の店から意思が少しずつ消えていき誰の店かわからないような店頭の風景となります。Title eで売れる本、売りたい本というのは毎日出版される本のなかでも限られていると思っていましたので、当初から取次の新刊配本パターンは断りました。」

そうすると、「新刊は入ってこなくなるので」自分から注文をすることが必須の要件となる。出版社からのダイレクトメールやFAXを頼りに新刊の情報を入手し、

「毎日発売されている、2000点近くある新刊」のうち「2、3パーセントにしか過ぎない」新刊を注文し、仕入れ、販売しているのだという。

このような事例はほんの一部であり、大取次との口座をもたない小出版社、独立系書店などは近年、確実に増え始めている。現在進行系の新しい試みは、それがどこまでビジネスとしての普遍性をもつかは未知数だが、オルタナティブの萌芽であることは疑いえない。現状では、たしかに個人の力量に多くを負っている小さな動きではない……としても、だ。

まとめ——自覚のない成功体験としての書籍流通

雑誌をメインとした出版流通システムは、その内部に「書籍」をも抱え込み、近代—現代を貫くインフラを形成した。だが前述したように、書籍が雑誌と同じ大規模なプラットフォームを使って流通される国は日本以外にない。

ドイツやアメリカの書籍流通における取次業の影響力の小ささについては、日本の出版人がしばしば視察に訪

れることもあって、すでにいくつも報じられている。ここでは、書籍がいまだ「大衆商品化」していないイランの書籍流通に関する研究を参照してみよう。

中東研究を専門とする経済学者、岩崎葉子氏は、イランでも日本と同様に「書籍という特殊な商品においては」「返本を前提とした委託販売や再販制が存在する」ことを述べている。だが、日本のような大規模な卸が存在するわけではないし配本制度があるわけでもない。そのかわりに「パフシェ」という小さな卸売業が存在し、出版社と専門書店との間に介在して、ネットワークを形成している。パフシェは小さな組織であるがゆえに、「仕入れや在庫管理は書店の責任とイニシアティブによって行われている。流通する書籍の小さくない部分は買い取り販売であるが」、「日本とは違って書店の専門化が進んでいるため不良在庫を抱えるリスクはかなり小さいといえる」。

その結果、パフシェも書店も「専門性を確立し、より小さいが確実な市場の囲い込みに成功」しており、年間に7万点もの新刊が市場に出回るといふ。イランと日本の違いは、再販制でも委託販売でもなく、巨大な卸売業

が「配本」によって書籍を送り込む商慣習の有無であり、言い換えれば「書籍販売ビジネスの主導権」の帰属先の違いということになる。^{*20}

いうまでもなく、イランと同じように欧米でもビジネスの主導権は取次ではなくて書店の側にある。

書籍とは、もとより「多品種少量」であることを宿命づけられた商材であった。そのために、マスマーケットを対象とした「大量生産・大量販売」の際に用いる巨大なプラットフォームの必要がない。その反面、きわめて手間のかかるものである。また定期購読型の雑誌とも違い基本的には購入の反復性がないから、新刊見計らいのように反復の購買行動を前提とした定形の販売手法は、なじまない。それよりも必要なのは、専門性と人的つながりだ、といわれ続けてきた。

実際に、日本でも専門書は、こうした専門性と人的つながりに基づいた販売が行われてきた。「うちの本の販売は書店とダイレクトに向き合って、差して商売している」という感じをもっている」とは元みず書房営業部長であり、人文会の代表幹事でもあった相田良雄氏の言葉だ。相田氏は『出版販売を読む』（1993）のなかで

「新刊の申込みも常備の申込みも、うちが提供する情報、書店から直接フィードバックされた売上カードを加工したデータに基づいて、書店が直接うちに申し込んできているわけだし、商いに取次は何ら介在していない」と述べている。

「取次が介在していない」とは取次の存在を意識することなく取引がスムーズに行われていたと解すべきだろう。もちろん取次は「介在」していたのである。当時の流通業界でしばしば注目されてきた「中抜き」のことをいっているわけでもないし、トランスビューのような出版社が書店と直取引するモデルのことを意図しているわけでもない。そのすぐ後に、相田氏自身も述べているように「運送」と「集金」機能だけを取次に委ねている、そういうものとして最適化されていたのだ。実際にこういう考えは専門書の営業担当者には広く受け入れられるだろう。相田氏はPOSが普及する前の90年代初期より出版社と書店が販売データを共有することの必要性を強調し、両者の直接のコミュニケーションを重視していた。商品情報と顧客情報を両者が共有することで、配本に頼らない最適な送本を志向していた。

だとすれば、専門書販売においては、日本でも部分的に「ビジネスの主導権」は取次ではなく、専門性を有した書店と出版社に帰属していたのであるともいえる。

では、専門書籍の流通に巨大なプラットフォームは不要だったのか。そうではない。

吉見俊哉氏の論考を思い出そう。近代国家の形成過程において、「文化的公共圏」が成立したのは出版市場の経済的な構造に支えられたからであった。1920年代以来、日本では「国土の隅々まで広がる密度の高い大衆的な読者市場が成立して」いた。このような、かたい人文書を読む層が全国隅々まで存在できたのは、雑誌流通に依存した大規模なプラットフォームによるものであった。

ただし、いくつもの先行研究をみてみれば、この巨大なプラットフォームが必ずしも誰かしらの綿密な計画などによって構想されたものではないことがわかる。各時代のプレイヤー間のさまざまな思惑が入り乱れ、戦前から戦後をかけて醸成されてきたのである。たしかに箕輪成男氏が80年代に述べていたように、日本の近代社会が

西洋をモデルにして形成されていく過程で、出版流通だけは独自に「内発的な発展」を遂げてきた「世界最高のシステム」という点で、誇るべきものであるには違いない。^{*21}だが、その内発的発展とは、いわば自覚のないままの「発展」であり、それゆえに自覚のないままに「無意識な成功」を積み上げてきたともいえる。

柴野京子氏が『書棚と平台』(2009)で詳細に示したように、書籍は、「近代出版物の単独の流通システム」として機能を完成させてゆく雑誌流通のあおりを受けて、その流通に「急速に巻き込まれ」、雑誌と同じように近代化を課せられた。だが、本質的に書籍と雑誌は別物である。にもかかわらずこの「重層的」なシステムに巻き込まれたあおりで、書籍流通は構造を複雑にし「緩やかな進化の期間を与えられないまま不本意な近代を通過することになった」のである。

そう、たしかに、書籍は「巻き込まれた」のだった。1920年代、とりわけ円本時代、それまでは書籍のみを扱う小規模な専門取次がいくつも存在していた書籍市場のなかで、大手の雑誌取次が書籍を積極的に扱うようになり、書籍ビジネスの市場構造を変質させてし

まった。それを雑誌による「支配」というか書籍の「タダ乗り」というか見方は立場によって異なるだろうが、書籍は雑誌流通に「巻き込まれる」ことによって、ある意味、「成功」もした。このシステムは41年に設立された戦時統制会社「日本出版配給株式会社」で頂点に達し、言論統制の中心的な役割を果たすというマイナスの経験もするが、敗戦後も基本的に引き継がれることとなる。その結果、短く見積もって消費社会が到来する70年頃まで、長く見積もれば、出版物販売額が頂点に達する97年まで、書籍流通は「無意識な成功」とも呼べる成功を収めたのである。

成功による最大の収穫は、文化や学術や思想への貢献、「文化的公共圏」の形成であることは先程も述べた。付け加えるならば、京都大学学術出版会の鈴木哲也氏が『学術書を書く』（共著、2015）でこう記している。「最も重要なことは、高度な研究書であっても、読者はごく狭い同業者（狭義の関心対象を同じくする人々）だけでなく「二回り外」であること、そして本の目的と内容に応じて、その「読者」の範囲を適宜拡張し、それに相応しく

記述すること」である。これは編集者が学術書を書く若い研究者に向けて発したメッセージであるが、この「二回り外」という表現が示唆するのは、出版市場の経済基盤と共鳴した学術出版編集者の基本的エートスであるといえる。

実際、学術コミュニケーションの観点からいっても、研究者コミュニティに閉じられがちな欧米の学術出版と比べて、日本の学術書は広く研究者以外に読まれてきたように思える。これは他所で指摘したことだが、2000年にアメリカの研究図書館の所蔵調査を行った、ユタ大学図書館のリック・アンダーソン氏によると、シカゴ大学出版の発行する学術書の50%が図書館需要であった。一方で、日本において人文会加盟出版社を調べたところ、学術書系の出版物でも大学図書館需要はわずか15%程度だった。^{*22}密度の高い学術書が、図書館のみならず個人に買われているのが日本の専門書出版の特色でもある。鈴木氏のいう「二回り外」の人々の存在を担保したのが巨大なプラットフォームであり、学術書の刊行を支えてきたのは、取次―書店のインフラと、その先に広範に広がる個人だった。

こうして、書籍にとって不要だったかもしれない巨大な出版プラットフォームは、あらゆるものを呑み込んだ重層的なシステムとして、アカデミズムにも貢献してきたのだ。

だが、それは良いとしても、日本の出版界はその時々において「書籍を流通させること」に無自覚ではなかったか。すなわち、一方できめ細やかな人的つながりと専門性を、他方で大規模なネットワークをそなえる、書籍流通システムの両義性はこれまで述べてきたように、誰かによって意識的に設計された結果ではない。もともとの成功の要件が捉えられることもないので、成功が揺らいでも転換が図れなかった。同時に環境の変化にも無自覚であり、そのために1970年代より続いていた同時代的な提言への対処を遅らせ、90年代の諸改革も結果的にはうまくいかなかった。書籍流通を「無意識の成功」と呼ばなければならない理由はここにある。

話を、平成に戻そう。元年を挟んで起きた大衆消費社会の到来、書店の郊外化、CVSの乱立は、いったん出版流通システムを最大化することとなったが、それは出

版が「大衆化」したことの帰結でもある。もはやそこには「読書共同体」や「文化的公共圏」は存在しないし、ましてや人文書を読む3000人の読者がいるわけでもない。平成も後期となり、キラキラしたバブル経済が過ぎ去って気づいてみれば、跡に残されたのは、消費社会の極北のような巨大インターネット書店と、行き場を失った巨大な流通プラットフォームだ。雑誌が衰退したからといって、代わりに書籍をCVSや郊外書店で売るわけにはいかないではないか。

平成と呼ばれた時代がもうすぐ、終わる。

本稿では、専門書の流通を軸に、1989年1月8日から2019年4月30日までの出版界の変化を記述するつもりだった。だが、書き始めてみると、じつはこの時代に起きたことは昭和の延長にしかないことを再認識せずにはいられなかった。問題はすでに多くの人々が70年代より指摘していたことの再現でもある。

だが、ここで紹介したように、平成期に語られたいくつもの言説によって、現時点でわたしたちは、その成功の要件も失敗の原因も、すでに知るところとなった。な

にが失われようとしているのかもわかるし、なにを手放すべきではないかについても相当程度わかっている。次のステージに向かう自覚的な解決策は、すでに出版界の中と外、それぞれ異なるベクトルから始まってもいる。これらの、知見とプレイヤーの実践だけが次の時代につながる数少ない方法なのである。

そうすることによってのみ、今度こそ、長かった「昭和」を終わらせることができる。

「執筆にあたって、多くの方々の論考を参照し引用させていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。また、本稿はわたしが所属するどの組織の公式見解でもなく、個人の責任において書かれていることもご理解ください。」

注

* 1 元みず書房社長、加藤敬二氏も『本とコンピュータ』2003年夏号で「みず書房の出版する人文・社会科学書であれば、3000部という数字を前提に企画することができました」と述べている。

* 2 『新文化』紙上では1992年3月14日号より9月12日号の14回にわたって「客注に挑む」という連載が掲載されている。

* 3 『出版指標年報』より。数値は常備寄託品(書籍)を含む金額基準

* 4 『出版年鑑』1991

* 5 日本出版取次協会の「書籍の適正流通を目指して」(1990年8月)には、27年間(昭和38年から平成元年)の値上がり幅は、水道料金6・0倍、そば9・0倍、J R初乗り12倍、理髪料金10・7倍に対し、雑誌は最高でも文春の6倍、書籍は2・6倍と記されている。

* 6 『出版年鑑』1993

* 7 『出版指標年報』より

* 8 能勢前掲書

* 9 能勢前掲書

* 10 『日販60年のあゆみ』2010

* 11 『飛翔 トーハン50年の軌跡』創立50年史編纂委員会社史編纂室、2000

* 12 日販『出版物販売額の実態』より

* 13 『円本』とは、1926年、改造社の『現代日本文学全集』を皮切りに多くの出版社から刊行された全集の総称である。一冊一円という価格の低さが庶民の読書欲を喚起したといわれている。

* 14 吉見俊哉「本のかわりに、何が文化的公共圏を支えるのか?」『別冊 本とコンピュータ』2000

* 15 通常の商取引で採用される委託販売とは異なり、出版物の委託販売の際は商品の所有権が移転し売上も計上することができる。返品とは出版社による買い戻しである。正式な委託販売と区別して出版業界の委託販売を「返品条件付売買」と呼ぶこともある。

- * 16 平野稔「情報ネットワークと書籍流通革命」『R I R I 流通産業』24巻8号、1992
- * 17 鈴木親彦「ジャパンブックセンターの再評価」『出版研究』45号、2014
- * 18 三浦敏「フランスにおける事業分野の調整——反アマゾン法の意味するもの」『フランスの流通・政策・企業活動』2015
- * 19 アメリカの出版産業については星野前掲書、ドイツ出版産業については日本インフラセンターの視察報告書などがある。
- * 20 岩崎葉子「『取次』のいない市場——イランの書籍流通」『アジ研ワールド・トレンド』No.256、2017
- * 21 箕輪成男『消費としての出版』弓立社、1983
- * 22 橋元博樹「学術書市場の変化と電子書籍」『情報の科学と技術』65巻6号、2015

橋元博樹（はしもと ひろき）
 東京大学出版会 営業局長。
 人文書出版社勤務を経て2000年東京大学出版会入職、2012年より現職。大学出版部協会理事、NPO法人本の学校理事。論文に「学術書市場の変化と電子書籍」（『情報の科学と技術』2015）、「2000年代の出版流通論」（『出版研究』2014）などがある。

15分で読む平成の「出版界」・ブックガイド

出版社	ISBN(978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
日本エディター スクール出版 部	4888882804	変わる出版流通と図書館	尾下千秋	— *	1998
慶應義塾大学出 版会	4766423525	学術書の編集者	橘宗吾	1800	2016
実務教育出版	4788916364	書店業のいまを読む——出版流 通の現状と業界活性化への視 点	能勢仁	— *	1994
青弓社	4787233776	出版産業の変貌を追う	星野渉	2000	2014
論創社	4846007737	出版社と書店はいかにして消え ていくか——近代出版流通シ ステムの終焉	小田光雄	2000	2008**
青弓社	4787231420	〈郊外〉の誕生と死	小田光雄	— *	1997
大日本印刷株式 会社ICC本部	4924956681	人はなぜ、本を読まなくなっ たのか？ 100-day dialogue (別冊 本とコンピュータ4)	「本とコンピュータ」 編集室(編集)	— *	2000
出版ニュース社	4785201531	出版研究 45号	日本出版学会編著	2600	2014
アルメディア	4900913080	(出版流通改革論2) 書籍再販と 流通寡占	木下修	— *	1997
日本エディター スクール出版 部	4888883061	オンライン書店の可能性を探る ——書籍流通はどう変わるか	木下修・星野渉・吉 田克己	— *	2001
出版メディアパ ル	4902251982	出版産業の変遷と書籍出版流通 ——日本の書籍出版産業の構 造的特質(増補版)	蔡星慧	2400	2012**
弘文堂	4335501258	書物の環境論(現代社会学ライ ブラリー4)	柴野京子	1200	2012
論創社	4846017545	出版の崩壊とアマゾン——出版 再販制度〈四〇年〉の攻防	高須次郎	2200	2018
苦楽堂	4908087042	まっ直ぐに本を売る——ラディ カルな出版「直取引」の方法	石橋毅史	1800	2016
苦楽堂	4908087059	本屋、はじめました——新刊書 店Title開業の記録	辻山良雄	1600	2017
日本エディター スクール出版 部	4888882033	出版販売を読む——営業部員の 財務感覚	相田良雄	— *	1993
弓立社	4896678208	消費としての出版	箕輪成男	— *	1983
弘文堂	4335551284	書棚と平台——出版流通という メディア	柴野京子	2800	2009
京都大学学術出 版会	4876988846	学術書を書く	鈴木哲也・高瀬桃子	1700	2015
晶文社	4794968777	口笛を吹きながら本を売る—— 柴田信、最終授業	石橋毅史	1600	2015

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
晶文社	4794969514	ローカルブックストアである ——福岡 ブックスキューブ リック	大井実	1600	2017
亜紀書房	4750512235	書店の棚 本の気配	佐野衛	1600	2012
晶文社	4794970244	市場のことば、本の声	宇田智子	1600	2018
青土社	4791703050	ユリイカ2016年3月臨時増刊号 総特集 出版の未来——書店 ・取次・出版社のリアル	ユリイカ編集部	1300	2016
日本エディター スクール出版 部	4888888066	出版販売の実際(オンデマンド 版)	須長文夫・相田良雄 ・柴田信	3000	2004
みすず書房	4622070294	出版と知のメディア論——エ ディターシップの歴史と再生	長谷川一	3500*	2003

注：*は品切れ。

**は本文では第一版を記載。

文喫 六本木——新しい本屋の実験

伊藤 晃（文喫 六本木 店長）
有地 和毅（YOURS BOOK STORE ブックディレクター）

2018年12月11日。六本木に入場料のある本屋がオープンしました。文喫 六本木。文喫とは、文化を喫する、入場料のある本屋です。そして、本と出会うための本屋です。入場料を払って中に入れば、営業時間の9時から23時まで何時間でも滞在して、ゆっくり本を選ぶことができます。じっくり本と向き合い、意中の本と出会うための時間を提供する場所です。

どんな本が売れているのか

オープンから1ヶ月経って、どんな本が売れているか、ユーザーがどんなふうに通じているのか、少しずつ傾向が見えてきました。入店客の30〜40%が本を購入しています。一般的な本屋と比較しても高い傾向にあると言えるのではないのでしょうか。ジャンルとしては、日本文学、ビジネス、アート、食に関する本がよく売れています。これは店内のジャンル構成比、六本木という土地の特性、ユーザー層などの掛け算の結果でもあります。客単価は、入場料を除いて

3000円程度です。一般的な本屋では、客単価は13000〜14000円程度ですので、高い傾向にあると言えます。客単価が高まる要因としては、販売している書籍のラインアップの価格帯を反映していることがまずひとつ。そして、まとめ買いをすることが多いというのがもうひとつ。購買率の高さと、まとめ買いの多さは、時間をかけてゆっくりと本を選べることに、1回の来店で多くの本と接すること、そして、1冊当たりの接触時間が長くなること、といった理由がありそうです。

文喫の体験について

文喫の体験は店内の奥へと進むほどに本との関係性が深まるようにデザインされています。本屋へ行き、本を見つけてから購入に至るまでのプロセスを細分化し、それぞれのフェーズにある程度の時間幅を持たせるならば、本を選ぶというこの意味合いが変わってきます。本に目をやり、表紙に触れ、手に取り、本を開き、ペラペラとめくったり、目次を見たり、序文を読んだり。本を選ぶまでの微細な行為の積み重ねの中で購入の動機が強まっていくのを、ユーザー自身を感じ取ることでしょう。また本屋からユーザーへのアプローチも多様になるはずです。

それでは、文喫でのユーザーの行動を店舗の前の道行きから順にトレースしていきましょう。ユーザーを「あなた」と呼んでみます。あなたは六本木駅から六本木ヒルズへのメインストリートとも言える店舗前の道を歩いています。「本」と書かれた看板が目に入り、大ガラスの向こうの店内の壁に大きな字が躍っているのを見つめます。文喫の入り口に位置する展示室です(写真1)。



写真1 展示室

気になったあなたは入り口の自動ドアをくぐるでしょう。大きく開けた空間、美術館のような白い壁では本にまつわる展示。展示室での体験は、すれ違いざまにはっと目が合うというような感覚です。

次にあなたの左手側には雑誌がずらりと並んでいます。マガジンウォールと呼んでいます(写真2)。面陳のホルダーには取っ手がついていて、蓋をパカッと開けることができます。図書館の雑誌の什器で中にバックナンバーが入っているようなものを思い浮かべてみてください。ただし文喫の場合、中身はバックナンバーではなく、雑誌のテーマや特集に関する書籍が入っています(写真3)。たとえばラテン音楽の雑誌なら、トロピカル・シヨロ、タンゴ、秩父前衛派についての書籍が入っています。雑誌の持つ幅広い興味への入り口としての役割を拡張する陳列です。あなたはマガジンウォールの蓋を開けるとい



写真2 マガジンウォール



写真3 マガジンウォールの蓋を開けると
雑誌のテーマや特集に関連する書籍が入っている。

う能動的な行為によって本と出会うマインドを整えるとともに、階段を上がった先にある本棚を見てみたいと感じるでしょう。

階段を上がった先は入場料が必要なエリアです。1階の受付で入場料を支払い、バッジを受け取ります。「本と出会うための本屋」というフレーミングと、入場料を支払うというスイッチであなたの意識は「本と出会う」ことに切り替わっているはずで、階段を上がると本棚が広がっています。そこから先は本を選ぶ時間。あなたはどんな本と出会うでしょう。

あなたはまず奥のロッカーに鞆をしまってから、カウンターでホットコーヒーをオーダーし、すぐそばにあるカウンター席にカップを置きます。それから一度席を立って、本棚の前の島台を見てみます。島台は3台。平積みの本が並んでいます。文喫の平積みは同じ本を複数冊積んでいるのではなく、異なる本が5点ほど1冊ずつ積み上げられています(写真4)。積み上げられた5点は関連性を持たせていることもあればそうでないこともあります。あなたが一番上に見えている本を手にとると、次の1冊が見えます。関連性がある場合、最初に興味を持って手に取ると次の1冊にも興味を持つだろうし、関連性がない場合もあなたはなんらかのストーリーを読み取るでしょう。(本屋から提示する関連性は伝わらないこともあります。提示しない関連性が読み取られることもあります。だから、重要なのは関連性を読み取る能動的なモードに切り替えさせることなのかも知れません。)

次にあなたは本棚の間に入っていきます(写真5)。本棚のあるゾーンを選書室と呼んでいます。「ユーザーが本を選ぶ場所」という意味合いです。本はオーソドックスな分類がなされています



写真4 文喫スタイルの平積み

が、文庫の隣に四六判、その隣にコミックと
いったように判型によって分けることなく内
容によって並んでいます。棚ではところどころ
面陳をしています。面陳は平積みと同様に、
異なる本が数点1冊ずつ重なっています。レ
コードをディグるように、奥へと向かってパ
タパタと本をめくる動きに誘われるでしょう。

棚の中をさまよいながら、あなたは野原で
ベリーピッキングをするように、1冊、1冊
と手に取っていくでしょう。1冊手に取るご
とにあなたの興味は枝分かれしていきます。
クリームソーダについての本を手にとれば、
喫茶店や、ドリンクのつくり方や、レトロな
料理の記憶について連想されるでしょう。そ
の後で、喫茶店の本を手にとれば、カフェの
多い街、古民家のリノベーション、古本にも
興味の枝が伸びていきます。棚の間を回遊し、
次々に本を手にとるにつれて、あなたの興味

は最初に抱いていたものとは違うものに変わっているはずです。

5冊ほどピックアップしたあなたは座席に戻り、1冊1冊を眺めてみます。興味の連鎖から思わぬつながりを見出すこともあるでしょう。積み上げた本のタイトルからその時の興味の広がり記録することもできます。ゆっくりと座って本を吟味することで、ちょっとした興味から手に取った本にも、のめり込みやすくなるでしょう。5冊の本を吟味したあなたは2冊を座席にキープし、3冊を返本台に戻して、再び棚の間を回遊します。何度かの回遊を繰り返し、あなたは4冊の本を購入することに決めます。1階のレジで入場用のバッジを返し、そこで本を購入できます。

ここまでが文喫ユーザーが本との関係性を深めるプロセスです。この過ごし方は一例にすぎません。ひとりで積み上げた本を見比べている人もいれば、本を片手に会話をしている人もいます。

ビジネス書のザッピングをする人、ちょっとした作業の合間に本からインスピレーションを得る人、小上がりでクッションにもたれて本を読む人、二人掛けのテーブルで向き合って読む人もいます。このように文喫のユーザーが本と接触する様態には大きな振れ幅があります。この振れ幅が重要なのではないのでしょうか。人はさまざまなモードを切り替えながら生きていて、その時々によって興味を



写真5 文喫の本棚

持つ本は異なります。ひとりで選ぶ本、仕事モードで選ぶ本、友人と会話するソーシャルなモードで選ぶ本、これらはどれも異なった本になるでしょうし、同じ本であったとしても異なる意味づけがされるでしょう。過ごし方の多様性が、出会う本の多様性につながるのかも知れません。

文喫の選書について

文喫では複数人による選書・企画・棚づくりを行っています。オープン前の段階では日販のブックディレクションブランドYOURS BOOK STOREの2名を中心に文喫の運営会社である株式会社リブプラス商品部の協力を得ながら、初期のラインアップを構成しました。オープン後は、ひとつのジャンルでも常に複数人の視点を入れながら棚を運用する体制を整えています。またユーザーが手に取った本、購入した本によっても棚は変化していきます。ユーザーを含めたネットワークによって本屋の本棚は成立しています。本棚が複数のプレーヤーを媒介するメディアとなり、本の売買を含むコミュニケーションを成立させます。

もし、複数性によって成立する本棚に単一の主体を想定するとすれば、本棚を通して本のやり取りをするエコシステム全体をマネジメントする主体です。ユーザーの巻き込み方によってはコミュニティマネージャーにも近くなりそうです。文喫ではユーザーによる読書会も企画されており、コミュニティを巻き込んで売ることが実現しつつあります。サロンビジネスや、クラウドファンディングによる出版プロジェクトに接続することもできるでしょう。プロジェクトベースの都市型コミュニティにリアルな場を掛け合わせることで、コミュニティが根つき、新た

なプロジェクトにつながっていきます。ローカルデザインの文脈で言えば、「関係人口」というコンセプトの導入によって、関係性を0と1のデジタルではなく、濃淡のあるスペクトラムとして表現することが可能になっています。文喫では、「購入する／しない」の0と1ではなく、その中間の豊饒な領域、つまり、触れたり、手に取ったりという本との関係性を深めるプロセスにフォーカスします。そのためのツールのひとつが返本台です。本を手に取り吟味した後、買わない本は返本台に戻します。本を見ることによって「購入する／しない」の間の「手に取る」という中間領域を切り分けることができるのです。他の誰かが手に取った本がわかるので、ユーザー同士の意識も変わってきます。同じ場所に集まった人の趣味趣向が断片的に見えてくることで、ゆるやかなコミュニティが生まれるかも知れません。つながっているようでもあり、切り離されているような関係性。重くなく、軽すぎない。本と出会うための本屋は、本を介して人と出会う本屋であり、人を介して本と出会う本屋であるのかも知れません。

最後に

文喫をプロデュースしたチームでは企業や業界の枠を超えて自由なディスカッションを重ねてきました。今の段階では実現できていないアイデアも無限にあります。そのすべてがユーザーにとって、本との出合いの体験を豊かにするものだと確信しています。文喫は新しい本屋であり、「本のある場所」のあり方を考えるための実験の場でもあります。文喫の取り組みのコアがどこにあるのか、これからの実践において突き詰められていくでしょう。また多様なプレーヤーとの

筆者近影



伊藤 晃 (いとう あきら)



有地 和毅 (あるち かずき)

コラボレーションによって思いもよらなかった方向性を見出すこともあるでしょう。ぜひ文喫の実験に参加して欲しい。そう思っています。

入場料のある本屋という新しい業態は、出版社の方々のご協力があったてはじめて実現することができました。この場を借りてお礼申し上げます。出版社の方々にとっても、著者の方々にとっても、出版に携わるさまざまな方々にとっても、文喫が意味のある場所になるようにしていきたいと思っております。皆様のご意見をいただくことで、文喫は育っていきます。ぜひお話を聞かせてください。そして、文喫という場を活用して、本と読者との新しい接点を一緒に創っていきましょう。

本の生態系のために、図書館ができること

大林 正智（田原市中央図書館）

1 絵本が我が家にやってきた

絵本が我が家にやってきた。天使が我が家にやってきた約半年後のことだ。

「ただいま。てんちゃん、ただいま。健診どうだった？」

「おかえり。はい、おかえり。健診ね、順調。いろいろ他の人のお話も聞けてよかったよ。でさ、絵本もらっちゃった。それ」

テーブルの上にそれは置いてあった。黄色と緑色の表紙が鮮やかな絵本だ。

『もこもこもこ』？^{*} へえ

「ブックスタートっていつて、みんなに絵本をくれるんだって。図書館の人が来てたんだよ。読んでもらったら喜んじゃって。それでさ、その本、なんか面白いんだよ。ご飯食べたらみんなで読んでみない？」

子どもが生まれて、いろんな人にお祝いに絵本をいただいた。みんなそれぞれ好きな絵本を選んで贈ってくれたんだな、と思うと嬉しくなった。久しぶりに手にした絵本はどれもきれいで、内容も面白い。そして何より、子どもがしっかり見て、聞いてくれるのがすごい、と思った。ちゃんと、子どもが喜ぶように作られているんだな、と。

絵本はけっこうたくさんいただったので、まだ自分たちで選んだり、買ったりしたことがない。ぼく自身が、

そして妻も、絵本にさほど強い思い入れがなかったということもあるし、バタバタして書店に行く余裕がなかったということもある。

絵本だけでなく、本を買うこと自体、かなり少なくなった。よく立ち寄っていた近所の書店が閉店して、最寄り書店が遠くなったので、必要と感じた本はネットで買うようになった。そうなると「必要」と感じる機会が少なくなり、いよいよ買わなくなる。絵本についても、そうなるのだろうか。

では、と『もこもこ』を読んでみる。これは、何と言うか、うん、今までに読んだことがない本だ。「意味」がわからない。わからないけど、なんだか面白い。

「声に出して読むとさらに面白いよ」と妻。読んでみる。

「しーん もこ もこもこ…」

いち早く反応したのは娘だ。笑っている。気に入っているんだ。

「絵を見せながら読んで」

妻に抱っこされた娘に向かって本を広げ、声に出して読んだ。やっぱり笑っている。これまでの絵本にも反応

してたけど、これはまた特別反応がいい。いい絵本に出会ったな、と思った。

娘が眠ってから、ふたりで読んでみた。声に出して。楽しくなってくる。これはいいな。妻が笑う。「はまったね」と。うん、はまった。

「他にもこんな絵本、あるのかな？ 今度本屋さんに行ってみようか」

「本屋さんもいいけど、図書館に行ってみない？ 今日、利用案内ももらったし。図書館の人、まず図書館で借りて読んでみて、赤ちゃんが気に入ったものを買うのもいいですよ、って言ってたよ」

それは合理的だ。しかし図書館って行ったことなかったな。それに…。

「図書館ってさ、静かにしなきゃいけないんじゃないの？ だいじょうぶかな」

「うん、それ気になって聞いてみたんだけどさ、土日はわざわざしてるから気を遣う必要もないし、平日もお客さんけっこう寛容だからだいじょうぶだって。もし心配だったら水曜日午前が「赤ちゃんタイム」になってるからそのときにどうぞ、ってさ」

「赤ちゃんタイム」って?」

「その時間はちょっと賑やかになるけど優しく見守ってね、って時間なんだって。館内放送とか入れてお知らせするらしいよ」

「そうか。そんなことやってるんだね」

「ウェルカム感あったよ」

そんな話をして、次の休みに三人で図書館に行くことにした。

週末の午前、こども室(というらしい)は確かに賑わっていて、これは「お静かに」って場所ではない。

「こんにちは。てんちゃん、さっそく来てくれたんだね。ありがとう」と図書館の人。

「こんにちは。先日はありがとうございました。三人ともあの絵本が気に入っちゃって」

「三人とも? それは嬉しいですねえ。じゃあ今日のおはなし会、「もこもこ」入れちゃおうかな。みなさんで聞いてくれますか?」

「大人も、あ、私もいいんですか?」

「もちろん! 大歓迎です。お父さんやおじいちゃんもけっこういらっしやいますよ」

「そうなんだ。ではおじやまします」

「ありがとうございます。ではまた後でね」

おはなしの部屋(というらしい)は狭い入口から入っていく洞窟みたいな空間で、中にいると安心するような、わくわくするような、不思議な感覚を味わえる。そしてお父さん、おじいちゃんらしき男性も何人かいた。

おはなし会は、わらべ歌や手遊びも交えた、一緒に楽しめるものだった。そして『もこもこ』。図書館の人はやはり読むのが上手で、みんな引き込まれていた。もちろん我が家の三人も。

会が終わって、図書館の人に話しかけてみた。会がとても楽しかったこと、大人も絵本を楽しむことに気づいたことなどを伝えた。

「それはこちらも嬉しいですね。大人になると、なかなか絵本の魅力に触れる機会が少なくなりますからね。大人向けの絵本は一般のコナーにもあって、そちらは子どもには少し難しいかもしれないけれど、こども室の絵本はどれも子どもも大人も読めるものです。このあたりが乳幼児向け、○歳児から楽しめるものもありますよ」

「あの、「もこもこ」みたいな絵本って、他にもあるんですか？」

「かなりお気に入りですね。ではこういうのはどうでしょうね」

彼女が手渡してくれたのは『にゆるぺろりん^{*2}』という絵本だった。これは『もこもこもこ』と同じ谷川俊太郎さんの本だ。長新太さんの絵のインパクトもすごい。そしてもう一冊「これはちょっと大人向けかな」と言いながら同じコンビの『えをかく^{*3}』も。さらに『もこもこもこ』と同じコンビの『ココロのヒカリ^{*4}』も。

「読んでみて気に入ったら借りていってください。それから何でもお聞きになりたいことがあったら、いつでも声をかけてくださいね」と言って彼女は去っていった。ぼくたちは小さな丸いテーブルで、渡された絵本を読んだ。どれもよかったけれど、特に「来た」のは『えをかく』だった。これは「意味」がわかる本だ。「まずはじめに じめんをかく」と始まって、いろいろなものをかく。とにかくいろいろなものをかいていく。てんちゃんがかれからかいていくものを想像して、何とも言えない気持ちになる。ぼくもいろいろなものをかいてきた。妻も。

誰だって。そして最初は「まずはじめに じめんを」かいたのだ。これからも「まずはじめに じめんを」かいていけばいいのだ。

その絵本は全部借りていくことにした。それから他の、大人向けの本や、クルマや料理やインテリアの雑誌も。何と言っても、今やぼくたちには三枚の図書館カードがあるのだった。

「図書館、よかったね」と帰りのクルマで妻が言った。「よかった。また来ようよ。人がいるのがいいんだね。あの司書さんみたいな」

「そうだね。いい人だった。てんちゃんのお気に入りがかかったら、今度は本屋さんにも行こうか。きつと本屋さんにもああいいうい人があるんじゃないかな」

「そうだ。そうしよう。まずは帰って借りた絵本を読もう」

ぼくたちにはかくべきたくさんの絵があった。まずはじめに、じめんをかくのだ。

2 危険で汚い世界の中で

久しぶりに飲もう、ということになって、友人の職場である図書館で待ち合わせた。彼の仕事が終わるまで本でも読もう、と館内を歩いてみる。夕方、閉館まで一時間ほどの時刻。雑誌や新聞を読む人。勉強しにきているのかおしゃべりしにきているのかわからない高校生。マンガを食い入るように読みふける子どもたち。ソファァーで居眠りするスーツ姿の男性。穏やかで平和な図書館の光景だ。

さて、何を読もう、と棚を見てみると、目に飛び込んできたのはあまり嬉しくない、胸が苦しくなるような言葉の並びだった。ここのとこ書店でよく見かける、攻撃的な、憎しみに充ちた、それでいて空疎な言葉。さっきまで穏やかで平和だと思っていた図書館が、別の場所に変わっていくように感じられた。

「お待たせ。さあ行こうか」友人がやってきて言った。
「こういう本も図書館にあるんだな」

私はその本の背に指を乗せた。彼はたじろいだけれど

も、気を取り直したように答えた。

「あるね。そしてこういう本もある」と別の本の背に指を乗せた。なるほど私が指した本とは違う性格のものだ。

「多様な観点、ってやつだな」と私は以前彼に聞いた「図書館の自由に関する宣言」を思い出しながら言った。
「しかしね、そっちの観点は人を傷つけないが、こっちの観点は人を傷つける。同列に扱っていいものなのか？」

「では、これは個人の見解であって所属組織を代表するものではありません、と一応前置きをして。どっちの観点も人を傷つける可能性はある。もっと言えば、人を傷つける可能性を持たない言葉はないし、あったとしてもそんな言葉に意味はない。言葉でできている本はすべて、人を傷つける可能性を持っていると思うよ」

「御説御もっとも。では傷ついてもガマンしろ、と？」
「ガマンしろとは言わない。傷ついた、と言えればいい」
「誰に？ 図書館の人に？」

「図書館の人に言っても、その本はなくならないだらうね」

「だったら図書館は人を傷つける可能性をたくさん持った場所、ということになる」

「それはそうだ。考えてみればすごい場所だからな。一見穏やかで平和だけれど。ただ、図書館は世界の反映であつたりもする。世界が危険で汚い場所だったとしたら、図書館だけそうじゃないというわけにはいかない。無菌室でも本好きのサンクチュアリでもないから」

「危険で汚い図書館か……」

「そういう部分もあるってことさ。そしてその危険や汚さをなくそう、減らそう、という使い方もある。図書館にも、本にも」

「それはどういう？」

「まあ簡単に言うと、読んで批判するってことかな。タイトルと著者名でなんとなく内容もわかった気になりそうだけれど、批判するんだったらしっかり読んだほうがいい。建設的な批判をすることで、その問題に光を当て、危険や汚さをなくす、減らすことができる……可能性がある。問題を提起すること自体はそう難しいことではないし、その批判が例えば本になって書店に、そして図書館に置かれれば、議論を広いところに連れ出すことができる

るし、記録にも残る」

「それは認める。しかし長い道のりだ。そうなって危険や汚さがなくなるまで、ガマンし続けろということか」

「ガマンし続けろ、とは言わない。実際に危険や汚さがある以上、そうやって対処していくしかない、ということだよ」

「言い分は聞いた。君を責めても仕方ないからな。でもその批判だの議論だののために傷つく人間がいるってことも忘れないでほしいな」

「うん。最近、図書館について書かれた文章でこんなのを読んだんだ。「ヘイト本」の氾濫について「出版物の内容を判断するのは利用者」「図書館(員)がその是非を判断するべきではない」という原則論を述べたうえで「マイノリティが図書館の開架から心理的圧力を受ける状況が望ましいものだとも、原則論だけを唱えていれば解決する問題とも思われない。現状では図書館員として取り組めることは限られているが、それ故に図書館の外部でレイシャルハラスメントやヘイトスピーチに反対する市民的責務があることを確認しておきたい」と言っていた。^{*}重いな、と思ったよ」

「考えている人はいるんだな。ではその「市民的責務」について聞こうじゃないか」

「ああ。しかしそろそろ場所を変えようか。近所に旨い泡盛の古酒と生マッコリを飲める店がある」

「そういう情報だけは詳しいな、相変わらず」

「だけ、ってことはないだろう。まあとにかく飲もう。

アルコールの入った飲み物がすべて、肝臓を傷つける可能性があるかどうかはちょっとわからないけどな」

私たちは図書館を出た。危険で汚い世界の中にも、美しいものがあることを確認するために。

3 いきいきサロン

いきいきサロンに着くと「今日は図書館の人が来るよ」と言われた。

いきいきサロンというのは私ぐらいの、まあまあ元気な年寄りが月に二回、お寺に集まっておしゃべりをしたり食事をしたりする会だ。ゲームをしたり、歌を歌ったりもする。しかし図書館の人が来たことはなかった。

「何しに来るの?」

「何か、面白いことをやってくれるらしいよ」

テーブルを並べて、おしゃべりをしながら待っていると、やがてその人たちがやってきた。図書館の人が男女ひとりずつと、ボランティアの女性がふたり。

自己紹介を終えると「今日はみなさんとゲームをしたり歌ったり、それから昔のお話なんかを聞かせていただけたらな、と思います」と言う。ゲームや歌はわかるけど、私たちの話を聞くってどういうことだろう。

最初に始まったのは紙芝居。『金色夜叉^{*}』だ。熱海の海岸で「今月今夜のこの月を…」という、あれ。話は知っているけど、図書館の人がなかなか熱演で面白い。みんなもそう思ったようで、終わると拍手が起こった。

次のゲームは、食材をひとつずつ出していつて何の料理ができるかを当てる、というもの。第一問の最初のヒント「砂糖」で、トシさんがいきなり「おしるこ!」と答えた。ふだんはのんびりしているトシさんが、急に大きな声を出したのでみんな笑った。はたして「おしるこ」は正解で、これまた拍手。ヒントは「小豆」「もち」と続くものだった。

そんなクイズが何問あった後で、次は「手遊び」。

年が明けたところなので、餅つきの手遊び。歌に合わせて、杵で餅をつくように手を叩くとなぜだか楽しくなってくる。

「餅つきってされましたか？」

「最近はしてないねえ。昔はみんな集まってやったもんだけど」

「どんな方が集まったんです？」

「そりゃ親戚一同と、近所の人も来たもんだよ」

「つく前の、蒸したもち米をちよっと塩をつけて食べると美味しいんだ。だから最初の方はみんな一口ずつ食べるもんだから餅が小さくなってねえ」

「百回ぐらいいはつけと言われたなあ」

「百回もついたらつき過ぎだわ。餅じゃなくなっちゃうに」

「そうかん？　うちは百回はついたらけどなあ」

みんな口々に餅つきの思い出を話し出す。

餅の話が一段落すると、今度はちよっと小さめの火鉢が出てきた。

「これ、みなさん使われましたかね」と図書館の人。

「こういうのはお客用だったねえ。いつもはもっと大

きい火鉢にみんなであたるけど、お正月なんかで人が集まるとこういう小さい火鉢をたくさん出してきて、それぞれあたるだよ」

「え、たくさんあったんですか？」

「そうだよ。嫁入りのときに持つてくることになったから、だんだん増えるだな」

「へえ、嫁入り道具ですか」

「それで餅を焼いたりしたなあ」

「これはいい火鉢だわ。どこから持つてきたの？」

「図書館に寄付してもらったんですよ」

「へえ、図書館に火鉢あるの？　本みたいに？」

「はい、あるんです。まあ今のところ貸出はしてないんですけどね、本と違って」

「そりゃ貸したほうがいいな」

「そんなの借りる人おるか？」

「どうでしょうねえ」

次に取り出したのが「あられ煎り」。昔はどこでもあったものだけど、最近は見かけなくなった。

「ああ、これに餅の、小さいぼろぼろしたのを入れてね、その火鉢であぶって…」

「今で言うお菓子みたいなもんだ」

「昔は何でも作ったねえ、売ってなかったもん」

「味付けはどんなだったんですか？」

「塩！」と大きな声で言ったのがシオさんだったので、みんな笑った。

「砂糖を入れてもうまいよ」

「里芋をすって入れたりもしたね」

「そうするとよく膨らむもんで」

「よく姉さんが作ってくれたなあ」シオさんは目をつぶって言った。みんな少し静かになった。

「本も持ってきましたよ。図書館ですから」と言っているのが広がったのは『〇〇の昭和』という本だ。〇〇というのはこの町の名前。町の昔の様子がよく伝わる写真集だった。懐かしい街並みや風景の写真にみんなも嬉しそうだ。

「私が行った小学校だ。昔は大きい建物だと思っただけど、こんなに小さかったかねえ、木造で」

「このデパートの屋上は遊園地になっとなつて、子どもが小さいときはよく連れてったよ」

「いろいろ変わったけど、山の形は変わらん」

商店街の写真でカンさんが声を上げる。

「これ、私の家。〇×書店」

「カンさんところ、本屋さんだったの。どおりで今でも本好きだもんね」

「うん。でも戦争で焼けちゃっただよ」

沈黙。

「楽しかったな。隣の洋品店のおばさんが優しくしてくれたり、喫茶店のおじさんがしょっちゅう遊びにきてたり。でもこんな写真があるなんて知らなかったよ。嬉しいなあ。他の写真も見たいし、この本欲しいわ」

「これは図書館の本なので差し上げられませんが、お貸しすることはできますよ。それから、もしずっとお手元に置きたいようでしたら本屋さんで買うこともできます」

「売っとるなら買いたいわ。どこの本屋さんにあるかねえ」

「ご希望の本屋さんがあれば図書館から注文しておくこともできますよ。^{*}受け取りはその本屋さんに行ってもらわないといけません」

「本当？　じゃあそうしてもらおう。駅前×〇書店さ

んにお願いしようかな」

「ではこの用紙に記入してもらって、用意できたら×
○書店さんからお電話がきますからね」

カンさんは満足そうに笑った。

最後に『上を向いて歩こう』をみんなで歌って、図書館の人たちは帰っていった。

「あの人たち、何しに来たんだっけ？」

「元気をはいたつに來たとか言ってたよ」

「元気？ 元気になったかん？」

「どうかねえ、なったかもねえ」

図書館か、と私は思った。息子たちが最近図書館に通
いだしたと言っていた。私も一度行ってみようか。

4 本の生態系

「本の生態系」を想像する。著者がいて編集者がいて、
出版流通各者がいて、読者がいて、その読者が著者に還
流する。そんな「本」が生きている、生きていく生態系
だ。時間をかけて生成された複雑な生態系は、環境の変
化に柔軟に対応して生き残る。今起きている、起こりつ

つある変化に、本はどう対応していくだろう。

その生態系の中で、出版社も、様々な形の小売業も、
図書館もそれぞれの役割を果たしている。図書館の役割
は産み落とされた本を読者に届けること。そして読者層
を広げることだ。ここではどんなふうにそれがなされて
いるのか、そしてそこにどんな困難が伴うのか、物語形
式で考えてみた。フィクションであって、現実の図書館
であったことではないけれど、どこで起こっても不思議
な話ではない、と思う。

さらに、図書館の強みは読者（図書館利用者）と直接に接
することができるというところでもある。その強みを活
かして、読者の反応を本の生態系全体にフィードバック
することもできるのではないか。

著者と読者をフィジカルにつなぐ、講演会などの取り
組みには歴史があるし、書店や出版社との協働の例も多
い。「果実」としての「本」を届けるだけでなく、その
「根」に水や栄養を供給する活動を図書館ができたなら、
本の生態系はいっそう豊かさを増すに違いない。そんな
ことを考えながら図書館の現場で次なる企みを巡らす図
書館員は、けっこうたくさんいるかもしれない。

注

- * 1 『もこもこもこ』 谷川俊太郎／作 元永定正／絵 文研出版
一九七七
- * 2 『にゆるべろりん』 谷川俊太郎／文 長新太／絵 クレヨン
ハウス 二〇〇三
- * 3 『えをかく(新装版)』 谷川俊太郎／作 長新太／絵 講談社
二〇〇三
- * 4 『ココロのヒカリ』 谷川俊太郎／文 元永定正／絵 文研出
版 二〇一〇
- * 5 「公共」 図書館の行方」新出『現代思想』二〇一八年一二
月号
- * 6 『金色夜叉』 尾崎紅葉／原作 遠山昭雄／監修 サワジロウ
／脚本・絵 雲母書房 二〇一二
- * 7 愛知県の田原市図書館では「書店注文制度」として、図書
館利用者からの本の注文を、田原市書籍商組合を通じて市内
書店に届ける事業を行っている。

『中井久夫集』 刊行までのこと

以前、鶴見俊輔さんと立ち話をしていたとき、「個人著作集や全集というのは、もうむつかしい時代になってきましたね。売れるのは河合隼雄ぐらいだ」と鶴見さんが言った。当時、岩波書店から『河合隼雄著作集』が刊

行されている頃のこと、一九九九年の話である（一九九四年に刊行の始まった『河合隼雄著作集』は全十四巻、世紀を超えてから加わった第二期・十一巻をあわせて計二十五巻の著作集になった）。「そうですね、僕もみすずについてそのことを実感します。単行本に加えてわざわざ著作集や全集を買おうとする読者は減っているし、定期の読者は激減している。それに自宅の本棚に全集を並べる余裕のある人がいったいどれくらいいるのか」と常識的な応答をしながら、心の中では、筑摩書房から刊行されていた『鶴見俊

輔集』全十二巻（その後、続・全五巻を二〇〇〇年から刊行）は、いったいどれくらい売れているのかということ、そして中井久夫先生のことを考えていた。

その二年前の一月のことである。年賀状代わりに送られてきた中井先生（長年呼び慣わしてきたから、ここでも以下、中井先生と記す）の手紙は、普段の流れるような手書き文字ではなく、A4二枚にワープロ文字でぎっしりと書かれていて、一枚目には、その一カ月前ほどに脳が原因でからだに異変があり、その後検査した結果についての詳細が書き連ねられ、二枚目にはそのことを踏まえて、みすず書房、あるいは僕との今後の仕事について紙面が割かれていた。

その後、中井先生自身が、その頃のご自身の病状につ

守田 省吾（みすず書房 代表取締役社長）

いてある程度書かれていたと記憶するので、大枠をここに記しておいてもいいだろう。

阪神・淡路大震災後の一九九五年六月に開設された「こころのケアセンター」の所長として、中井先生は一九九六年十月に災害精神医学的ネットワークの実地調査のためロサンゼルスに出張されたが、帰国直後から左手と唇に麻痺を覚え、その後激しいめまい発作を起こされた。「単なる一過性脳虚血にしては長すぎ……」震災後には、高血圧・動脈硬化・糖尿病がなくて心筋梗塞や蜘蛛膜下出血が起こっている例が少なくなかったので、そういう、ストレス後の障害かもしれません」。

『1995年1月・神戸——「阪神大震災」下の精神科医たち』や『昨日のごとく——災厄の年の記録』を読まれた方ならおわかりのように、当時の中井先生の日々は「激務」ということばをはるかに超えていた。患者の臨床にあたるのは控えられていたようだが、日常の大学業務に加えて、震災に関係するさまざまに自ら従事し、そのうえ疲弊しきっていた部下や看護師など周辺の人たちへの配慮にも心を注いでいた。長年勤務してきた神戸大学医学部の退官も一九九七年三月にせまり、そのため

にもすべきことがたくさんあった。出版、それもみずず書房の単行本だけを切り取ってみても、一九九五年にはサリヴァン『分裂病は人間的過程である』（二月）、『1995年1月・神戸』（三月）、『家族の深淵』（九月）、ヴァレリー『若きバルク／魅惑』（十一月）と、ジャンルもまちまちの著書四冊を刊行し、翌九六年には、上記『昨日のごとく』のほか、ハーマン『心的外傷と回復』を世に送った。大著『心的外傷と回復』の翻訳スピードはすさまじく、通勤の行き帰りのバスの停留所でも、バスが来るまでの時間を惜しんで翻訳をつづけていたほどである。それまで長年にわたって統合失調症を中心に専門にあたった中井先生が、阪神・淡路大震災を契機に心的外傷問題に軸足を移した最初の仕事であり、その熱意および認識の妥当性は同書の「訳者あとがき」から読み取ることができる。

そのような長期にわたる過労と心身への負荷が要因の一部であったことはたしかだろう、先に書いたように、中井先生のからだに異変が起こった。そこで、とりあえずは脳を酷使するのはやめること（今までのように十時間以上ぶっ続けでなく、二時間で一休みというふうに頭を使う）、

彼がその後たびたび使う表現で言うなら「アイドリング状態」を設けること、それでも数年先のことはわからない不安が心にもたげ、先の手紙になった。

手紙の二枚目には、みずす関係の今後の仕事を整理してまとめましたと前置きがあつて、十二項目が書かれていた。

一番目には「最終講義」のこと。神戸大学の最終講義を本にしようと二人で約束していたからである。「二月五日に間に合うかどうか。再発をさけるため、これまでのような「ドーピング」はできませんから」とコメントが書かれていた。

以下、当時話を進めていたバリント『一次愛と精神分析技法』のこと、サリヴァン『精神科セミナー』と『精神医学と社会科学の融合』のこと、それと併せてサリヴァン著作集をつくりたいという願望、さらにサリヴァン・コンクルダンスのこと。これは誰もわからないだろうから一言しておく、サリヴァンの術語や概念や文章を全著作のなかから抜き出して整理することでサリヴァン理解を深めようという構想で、サリヴァン自身のことばを編集してサリヴァン自身に語らせる事典のようなもの

のである。さすがにこれは無謀に近い企画というか、実現しなかった。ほかに、アラン・ヤングの翻訳のこと（『PTSDの医療人類学』、『エランベルジェ著作集』のこと、ヴァレリー『カイエ』のこと、第三エッセイ集のこと（のちに『アリアドネからの糸』として刊行）などが書かれてあつて、最後の十二番目には、ほぼ次のように書かれていた。「私の著作集というものを考えるのが不遜でなければ、私としては、おつきあいのいちばん長いみずすに第一優先順位と考えています。できれば、翻訳も加えていただきたいと思います」。

二枚目の締めくくりには、「ずいぶん多いですね。どこまで行けるでしょう」とあつた。

幸いなことに、中井先生はその後元気を回復され、六十歳を越えた中井先生は、かつての、あの「中井久夫」とは違うものの、数多くの作品を世に送った。十二項目に挙げられていたものも、サリヴァンの一部とヴァレリーを除けばほぼ実現できたばかりか、エッセイ集は八冊に及ぶなど、当時考えていなかったような本を、翻訳ともども、ご一緒につくることができた。中井先生とタッグを組んで僕がつくった本は、四十冊近くにおよぶ。

最初の話に戻る。

鶴見さんと立ち話をしていた頃から、ときどき段ボール箱にどさっと入った抜き刷りや掲載誌やワープロ原稿などが中井先生から送られてくるようになった。神戸大学時代は、秘書の方がきちんとリストづくりと掲載文のファイルをされていて、それらはその後とても役に立つたけれども、神戸大学を退官されてからは、先生には秘書のような方はおらず、僕のところは無造作に段ボール箱に書類を入れたものが届くようになったのである。「今、こういうのを書いています」というメモとともに、ファックスで原稿が送られてくることも頻繁だった。

それらを整理・分類・編集して、その後のエッセイ集などがつくられていったのであるが、あるときから、一九六〇年代のものから順に社内で中井久夫書誌データベース化を少しずつはじめるようになった。もちろん将来の「全集」を見越しての作業であったが、実現の見込みはまったく読めないまま年月が過ぎていった。それにしてもすごい量であり、かつ新しい原稿や掲載抜き刷りの類いはどんどん増えていった。

二〇一〇年あたりから先生の執筆速度はゆるやかな

り、送られてくる原稿類も減っていった。僕から原稿依頼をすることも意識的に控えるようになった。しかし、二〇一一年三月十一日の東日本大震災直後には、阪神・淡路大震災のときの経験の知恵を伝えてほしいと考え、かつての「災害がほんとうに襲った時」と同じく月刊誌『みすず』に「東日本巨大災害のテレビをみつ——二〇一一年三月一日—三月二八日」を書き上げてもらった。先生の様子はわかっていたから、僕のほうである程度の規制はしたものの、その年の春から夏にかけて新聞雑誌の取材や原稿依頼が殺到する。先生は可能なかぎり対応されたが、かなり疲れられたようであった。書かれるものはめっきり減り、二〇年以上もつづいた『神戸新聞』の連載、「清陰星雨」のコーナーに二〇一二年九月二十八日に掲載された「日中国交四〇年に寄せて」が、ご自身でゼロから書いたおそらく最後の文章である。その後発表されたものは談話を元に起こして文章化したものがほとんどである。書きたいテーマなどについては熱を込めてしきりに話されるが、書くという行為には至らなかったようだ。

二〇一三年、それまでためていた原稿と、かつて発表

されながら単行本に収録していなかったものを書誌データから拾い出して、久々のエッセイ集『昭和』を送る』と『統合失調症の有為転変』の二冊を刊行した。表題の「昭和」を送る」という文章は、一九八九年に『文化会議』という一部の人向けの雑誌に発表されたまま、単行本掲載をずっとペンディングにしてきたものであったが、「そろそろいいのではないですか」「そうしましょう」となって、収録したものである。「昭和」を送る」のための「本書収録にあたってのノート」は力を入れてなんとか書かれたが、かつて真っ赤になっていた校正刷りは、ほとんど朱の入っていない状態で僕の手元に戻ってきた。

その後も三カ月に一度ほどのペースで神戸に出向き、先生のご様子をみながら話し合いの場をつづけたが、面談時間もだんだん短くなっていった。中井先生の著作をそろそろまとめてみようかと考えたのは、その頃、二〇一六年の半ばである。

個人全集や著作集を考える場合、著者の書いたものは断簡零墨にいたるまですべて収録する文字通りの全集から、エッセイだけを数冊レベルにまとめるものまで種々ある。その仕事の全体を歴史に遺すことを主眼とす

るもの、一部の熱狂的ファンのためにつくるもの、これまでその著者の本を読んだことのない若い読者にも届くことを願って編集するものなど、いろいろある。そういう大枠の方針に、著者サイドの意向や出版社の事情が重なり合って、焦点が絞られてくる。

僕は「中井久夫全集」は実現できないと最初から思っていた。それまで出版されていた先生の数々の著作や書誌データから判断して、『河合隼雄著作集』の規模をはるかに超えることは十分予想できた。鶴見さんと立ち話をしたときから二十年ほどが経ち、出版事情はますますよろしくなくなり、大規模な全集の企画は、みず書房の経済を圧迫することも容易に想像できた。「できれば、翻訳も加えていただきたいと思います」という中井先生の言葉は頭の片隅にあったから、先生、ごめんなさい、であった。

そこでまず、「これまでその著者の本を読んだことのない若い読者にも届くことを願って編集する」を基本方針とした。表やグラフを多用して統合失調症の回復過程を論じ、精神医学界に衝撃をあたえた初期の専門論文をはじめ、非専門家が読むには難儀なものは、一部は収録

するものの、その多くを外した。ある意味では、これら初期の論文群は中井久夫を代表するものであるが、断念することにした（そのあたりのものは『統合失調症1・2』にまとめて二〇一〇年に単行本化している）。『分裂病と人類』や『精神科治療の覚書』はじめ、他社から刊行されている単行本も収録しないことにした。

そのうえで、みず書房から刊行してきた中井先生のすべての著作、岩崎学術出版社から出ていた『中井久夫著作集』全六巻・別巻二、その一部も含めて成り立っているちくま学芸文庫の『中井久夫コレクション』全冊などのすべてのページをざっとではあるが目を通し、まず〇・△・×をつけていった。専門論文や他社刊行の単行本を省いても中井先生の書かれたものの数はまだまだ多く、質や反復に重点を置いてやはりセレクトしたかったからである（その頃、僕の頭の中では「中井久夫セレクトション」であった）。

そこでとりあえずリスト化したものを、年代順に配列した。それぞれの時代の中で、中井先生がそのつど考えてきたことをジャンルや分量などの編集を施さず、とにかく時間軸に沿って並べることで何が見えてくるかを

主眼として、総目次をつくった。基本方針にしたがって四六判とし、各巻平均五〇〇頁・全七巻プランと、各巻三〇〇頁強・全十二巻プランぐらいを考え、編集会議にかけ、他部署との相談もはじめた。十巻を超えると営業部は否定的になるだろう、でも巻数を減らすと一冊の価格が上がり、新たな読者は獲得できないかもしれない、といって、これ以上削るのもむづかしい。： そういうあれこれを経て、『中井久夫集 全十一巻』の企画が決まった。

企画決定から刊行まででよかったのは、営業部と出版部（製作部）とまめに相談したことだ。刊行途中から部数が減ってくることも予想して原価のシミュレーションをすることで、各巻のページ数の按配や刊行ペースなどを決め、不安要素は減っていった。それと、二十数名の方々から百字程度の推薦文を募り、内容見本その他プロモーションに活用し、併せて各巻の帯にそれぞれの文章を掲載できたのは、新たな読者獲得のためにも役立ったろうと思う。各巻の解説は、毎回違う人にそれぞれ書いてもらうのではなく、全十一巻すべてを、ノンフィクションライターの最相葉月さんをお願いした。最相さん

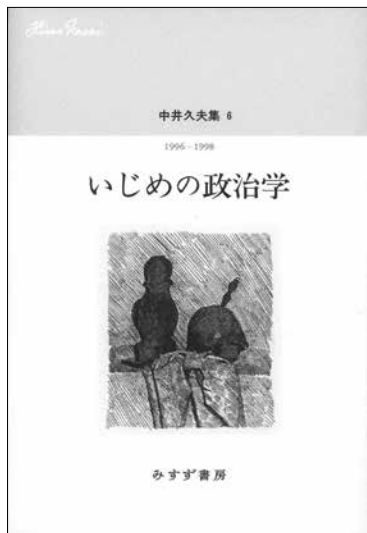
はこの十年近く、中井先生への聞き書きをつづけていて、僕も何度か同席した。中井先生のライフヒストリーと、そのつどの時代と、それに応じた著作のあり方を知るという『中井久夫集』の主旨から言っても、最相さんは最適任者であった。

内容見本が刷り上がってきたとき、神戸の中井先生のところに出向き、以上に書いたようなことをお話しした。先生は言葉少なであったが、とても喜んでおられた。一九九七年一月にご本人が僕に書かれたことを覚えておられたのかどうか定かではないが、「翻訳は入れないんですか」とは、言われなかった。

中井先生の著作は膨大である。未刊のまま残っているものも、実はたくさんある。最初期のウイルス学についての論文類や隠れたロングセラー「ウィルス学実験手技」、青木病院時代に書かれた精神科「往診マニュアル」、『芸術療法』に連載された初期の重要論文、公表を目的とせず遊び心で書かれたあれこれ……多くの人に宛てられた手紙は、いったいどのような規模になるのだろうか、他の医師たちとは書きぶりもおそらく違うであろう膨大なカルテには、何が書かれてあったのだろうかと思

る。

『中井久夫集』の完結が近づいてくると、やはり専門論文や他社刊行の単行本も入れたほうがよかったのではないかと、頭をかすめる。しかし、欲張りな禁物なのであろう。著者と読者と出版社のバランスを保つのは、やはりむづかしい。



『中井久夫集』(全11巻)
『6 1996-1998 いじめの政治学』
本体3400円

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷2-20-7 みすず書房内

2019年4月現在

社 名	担当者	〒	住 所	電 話	FAX
大 月 書 店	佐藤 信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	3813-4651	3813-4656
御 茶 の 水 書 房	平石 修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀 伊 國 屋 書 店	志田 則幸	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子 智	108-0073	港区三田2-17-31	3451-6926	3451-3122
勁 草 書 房	西野 浩文	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春 秋 社	吉岡 聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶 文 社	片桐 幹夫	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠信書房(休会中)		112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青 土 社	森 卓巳	101-0064	千代田区神田猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創 元 社	水口 大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	6811-0662	3219-7800
筑 摩 書 房	藤井若菜彦	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	澤畑 壘	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日 本 評 論 社	五月女 公	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白 水 社	岩野 忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平 凡 社	登尾 純一	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	朝倉 哲哉	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
み す ず 書 房	田崎 洋幸	113-0033	文京区本郷2-20-7	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	三上 直樹	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	3525-8460	3525-8461
吉 川 弘 文 館	片山 伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事 田崎洋幸

会計幹事 平石 修

書記幹事 片桐幹夫

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

販売・企画委員会 ◎朝倉哲哉 ○森 卓巳・志田則幸・澤畑 壘・五月女 公・登尾純一

調査・研修委員会 ◎水口大介 ○片山伸治・西野浩文・藤井若菜彦

広報委員会 ◎岩野忠昭 ○乙子 智・佐藤信治・吉岡 聡・三上直樹

人文会 ホームページ <http://www.jinbunkai.com/>

(各種情報／各社へのリンクはこちらからどうぞ)

「高校生のためのブックガイド」のご案内

人文会では会員各社の刊行物の中から、高校生に読んでほしい書籍を2点ずつ厳選し、「高校生のためのブックガイド」として1枚のリーフレットにまとめました。書店外商部様や書店店頭でのフェアなどで活用いただいております。



無責任の新体系

きみはウーティスと言わねばならない

若者は社会から押しつけられる「責任論」とどう対峙すべきなのか？日本社会における匿名性の限界について考察するフリーター系社会超批評。

荒木優太

本体価格 1800 円＋税

ふだんづかいの倫理学

平尾昌宏

自分なりの生き方の原則を作る！道徳的混乱に満ちた現代で、人生を炎上させずにエンジョイする、〈使える〉倫理学入門。

本体価格 1800 円＋税

晶文社

〒101-0051 千代田区神田神保町 1-11
Tel.03-3518-4940 Fax.03-3518-4944

2018-2019年版

哲学・思想図書総目録

哲学・思想一般 / 倫理学・人生論 / 美学 / 各国哲学 / 現代哲学 / 宗教一般 / 宗教学ほか

心理図書総目録

心理総論 / 基礎心理 / 発達心理 / 教育心理 / 臨床心理 / 精神分析 / 社会心理ほか

社会図書総目録

社会一般 / 家族社会 / 地域社会 / 産業労働 / 福祉・教育 / 社会問題 / 文化文明論 / 文化人類学 / 民俗学ほか

◎A5判・平均200頁 ◎頒価本体各286円

人文図書目録刊行会

〒162-8710

東京都新宿区東五軒町 6-24
トーハンビル内

政治に口出しする女はお嫌いですか？
スタール夫人の言論vs.ナポレオンの独裁
工藤庸子 本体 2400 円＋税
会話と文章を武器にナポレオン独裁に抵抗し、自由主義思想の祖となったスタール夫人の闘いを描く。 自由主義思想

メイド服とレインコート
ブリティッシュ・ファッションの誕生
坂井妙子 本体 3000 円＋税
メイド服、リバティ・プリント、トレンチコート——イギリスらしいファッションはどのように生まれたか。

マクダウエルの倫理学
「徳と理性」を読む
荻原理 本体 2500 円＋税
難解さで知られるマクダウエルの議論を、論点を整理しつつ丁寧に読解。

いっ そう
勁草書房

TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
<http://www.keisoshobo.co.jp>

池内紀

創業百年記念出版

東海道ふたり旅

道の文化史

定価（本体2000円＋税）

文化、経済、技術、風俗。「東海道五十三次」に描かれた「暮らし」を手がかりに道をひたすら歩き、今に繋がる糸をたぐりよせる。カラー図版多数。

春秋社

東京都千代田区外神田2-18-6
☎ 03-3255-9611 FAX 03-3253-1384

○web春秋 はるとあき 人気連載更新中!

<https://haruaki.shunjusha.co.jp/> ⇒



レオナルド・ダ・ヴィンチ

生涯と芸術のすべて

池上英洋

没後500年。膨大な資料を元に、世界史上最大の変革期・ルネサンスに生きた巨人の足跡と実像に迫る、第一人者による、本格評伝。

5400円(4月下旬刊予定)

筑摩書房

営業部 03-5687-2680

*定価は表示価格+税

<http://www.chikumashobo.co.jp/>

エネルギーの人類史

上下 パーツラフ・シュミル

エネルギーと文明の発展史についての壮大な研究成果。
2017年度ヒル・グレイツが選ぶ今年の5冊

各3200円

デカルト・ポリテイク

アントニオ・ネグリ

政治的存在論について

21世紀の現代思想と政治闘争・社会運動をリードする政治哲学者ネグリの幻の出世作、デカルト論の日本語全訳が遂に刊行

3200円

サイコパスのすすめ

P・T・エリオット

人と社会を操作する闇の技術

サイコパスたちに向けた衝撃の人生ガイドにして、すべての人にとって役に立つ画期的な人生ガイド。

2000円

青土社

東京神田神保町 ☎03-3294-7829
<http://www.seidoshya.co.jp/> (価格税抜)

★収録図版200点以上!

ダレン・ナイシュ、ポール・バレット 著
小林 快次 久保田克博、千葉謙太郎、田中康平 監訳

社元 恐竜の教科書

最新研究で読み解く進化の謎

体の構造、生態、多様性から、大量絶滅をいかに生き延び今日の鳥類となったかまでオールカラーで解説。
B5判・上製 240頁/定価(本体4500円+税)

石井洋二郎・藤垣裕子

続 大人になるための リベラルアーツ

思考演習12題

大人になり続けるために。12の問いによって思考の翼をさらに広げ、問題構成力、批判的思考力、市民的倫理観を養う。

本体2900円+税



東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
<http://www.utp.or.jp/>

大阪市中央区淡路町4-3-6

☎06-6231-9010 Fax06-6233-3111

千代田区神田神保町1-2 ☎03-6811-0662

知と文芸を横断する大好評シリーズ
STANDARD BOOKS
待望の第3期刊行開始!



今西錦司

生物レベルでの思考



柳田國男

ささやかなる昔

●B6変型判／224頁／本体1400円＋税

第3期続刊予定

- ・宮本常一(2019年6月)・今和次郎(8月)
- ・折口信夫(10月)・三木成夫(12月)
- ・龍膽寺雄／重森三玲(2020年2月)

平凡社

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町3-29

tel 03-3230-6573 fax 03-3230-6587

http://www.heibonsha.co.jp/

絲山秋子 たちまち増刷
絲的ココロエ
「氣の持ちよう」
では治せない
芥川賞、谷崎潤一郎賞受賞作家の著者が長年この病とどうつき合ってきたか、服薬ゼロになった現在からみた心得を綴るエッセイ!
加藤忠史氏(理化学研究所)推薦。
■1300円＋税

荻上チキ氏 推薦! ストップいじめ! ナビ
スクールロイヤーチーム 編

スクールロイヤー
にできること

■1900円＋税

学校には校則という名の「オキテ」はあっても法律という名の「ルール」がない!? 法律家から見た学校、弁護士が果たせる役割とは。

日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4

TEL: 03-3987-8621

https://nippyo.co.jp

法政大学出版局
http://www.h-up.com/
《叢書・ユニベルシタス 1090》
**社会的なものを
組み直す**

アクターネットワーク理論入門

B.ラトウール 著／池田 喬、堀田義太郎 訳
主体／客体の二分法を超え、脱中心的なネットワークとして社会を記述する画期的な方法論を、提唱者であるラトウール自身が解説する。 5400円

《叢書・ユニベルシタス 1092》

スポーツの文化史

古代オリンピックから21世紀まで

W.バーリンガー 著／高木葉子 訳

オリンピック競技会の古代と19世紀以降の近代スポーツの興隆とをつなぐのは近世の文化である。近世史の第一人者が独自の視点で描く通史。 6200円

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税別です

新刊
ダニ・ロドリック 岩本正明訳
貿易戦争の政治経済学
資本主義を再構築する
ポピュリズム的ナショナリズムと高度産業社会に充滿する不安を理解するための必読書。
本体2400円＋税
ダニ・ロドリック 柴山桂太、大川良文訳 本体2200円＋税
グローバリゼーション・パラドクス
世界経済の未来を決める三つの道
「大好評、6刷!」
ダニ・ロドリック 柴山桂太、大川良文訳 本体1800円＋税
エコノミクス・ルール 憂鬱な科学の功罪

白水社

東京都千代田区神田小川町3-24

tel.03-3291-7811 / fax.03-3291-8448

東大闘争総括

戦後責任・ヴェーバー研究・現場実践
折原浩 著

安田講堂攻防戦50周年、その後の社会のさまざまな問題がこの東大闘争で提起された諸問題が未解決のまま、いっそうの悪化をみる現状を、ヴェーバー学者として闘争に立ち向かった著者の渾身の闘争総括書。問題にかかわりのあるひとたちへの問題提起であるとともに鋭い挑発の書！ 2800円

加藤尚武著作集

全15巻
第5巻(第9回配本)

ヘーゲル哲学の隠れた位相 6800円

第1巻	ヘーゲル哲学のなりたち	5800円
第2巻	ヘーゲルの思考法	6800円
第3巻	ヘーゲルの社会哲学	5800円
第4巻	よみがえるヘーゲル哲学	5800円
第6巻	倫理学の基礎	5800円
第7巻	環境倫理	6800円
第9巻	生命倫理	5800円
第13巻	形と美	6800円



未来社

〒156-0055 東京都世田谷区船橋1-18-9
TEL03-6432-6281 FAX03-6432-6282
<http://www.miraisha.co.jp/> ※表示は税別

中国経済史

古代から19世紀まで
フオン・グラン 欧米、日中の研究成果を統合し、量的データとナラティブを融合させた画期的通史。山岡由美訳 6800円

ヴィータ

遺棄された者たちの生

ビール 家族や社会から見棄てられた者たちを收容する施設を起点に、その生きられた経験を描く。桑島・水野訳 5800円

シユネツト

ポーランド・ユダヤ人の世界

ホフマン 二つの民族が共存する町で、なぜホロコーストは吹き荒れたか、寛容の実践と多文化社会。小原雅俊訳 5800円

いかにして日本の精神分析は始まったか

西見泰子 矢部八重吉、丸井清泰、大概憲二、中村古映、古澤平作。伝説の五人の資料から草創期の歴史に迫る。三〇〇円

みすず書房 (税別)

東京本郷2-20-7 <http://www.ms2.co.jp>

近代東京の地政学

武田尚子 著 青山・渋谷・表参道の開発と軍用地
東京西郊から流行最先端の街へ。新旧が交錯する街は、どのように作られてきたのか。 1900円

朝河貫一と人文学の形成
海老澤表・近藤成一・甚野尚志編 イェール大学教授だった朝河の業績から、人文学のあり方を問い直す。 9000円

記憶の図像学

亡き人を想う
美術の歴史

加須屋 誠著 作品を生者と死者とのつながりとして捉え、果たしてきた社会的役割を描き出す。 2500円

吉川弘文館

東京都文京区本郷7-2
☎03-3813-9151 税別

講座 社会人教授入門

●文科省「実務教員養成プログラム」に対応した戦略的勉強術
松野 弘著 ●方法と戦略 社会的な地位と安定的な収入が得られる憧れの職業、大学教授・リスキュートされる研究者・教育者になるための詳細な戦略的勉強術を指南する。 *四六判・並製・288頁 本体2200円

デュルケムの近代社会構想

流亡貴族 著 ●有機的連帯から職能団体へ
いかなる社会を追い求めたのか。同時代の現実や思想への問題関心をふまえて、思索の軌跡から詳細に読み解いていく。 *A5判・上製・308頁 本体6000円

ミネルヴァ書房

京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税別

2019年4月25日発行 年3回発行 第131号

発行所 人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7 みすず書房内

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

〈非売品〉